
積もった山のギルドびと

夕霧ありあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

積もった山のギルドびと

【Nコード】

N7005J

【作者名】

夕霧ありあ

【あらすじ】

剣と魔法の世界の、ギルドが栄える街で暮らすごく普通の少年、リユード。彼は剣技の才能を持つものの、かつての出来事から、白魔術師を志していた。そんな彼はある日、裏通りの小道に建つ、小さなボランティアギルドに誘われるが……？ ギルド『積もった山』での騒がしい日々を、ここに綴ってゆく。不定期更新、ひとつの話は一話、数話で完結しています。6/14サブタイトル変更しました。

第一話 積もった山とオレとの出会い

オレ、リユードは一人、この街の地図を見ながら歩いていた。その地図には、様々な仕事をしているギルドの名前と紹介が書かれている。

今日、ギルドに所属することが出来る。そう思うと心は躍った。ギルド？ それは何かって？

簡単に言うとオレが住むこの街、デイベルクで栄えている、同じ目的を持った仲間で作られた組織のことだ。ある程度自由は保証されているが、かつて悪いギルドが台頭したために、国や街が作った規則に縛られている。

子供が働くのは問題があるのか、その規則とやらで加入資格は16歳以上と定められているため、昨日16歳になったオレは、やっとギルドに所属することが出来る、というわけだ。

治癒を専門とするプロの魔術使い、白魔術師の資格を取ることが昔からの、オレの夢。

それを叶えるためには、ギルドに所属して業績を上げることが最も近道であると言われるようだ。そこで、白魔術使いを募っているギルドを探していた。

しばらくの間、地図を見ながら様々な業種のギルドが立ち並ぶ街道を歩く。すると、すぐそばにあるギルドが目に残った。

そこには白魔術専門ギルド、と看板が建ててあった。自分にとっても丁度いいものと、オレはそのギルドの建物に足を踏み入れた。「悪いけど、うちのギルドはしばらく人を集めていないんだ」

ロビーにいた男性は残念そうな顔でそう言った。やっぱり所属するギルドを決めることは、そう簡単にはいかないらしい。

その後も白魔術師志望にとって有利そうなギルドを何件か探して、訪ねてみたものの、結果は同じだった。ギルドにも、様々な事情が

あるのだろつ。

他に、人手が少ないようで勧誘活動を積極的に行っているギルドも見られたが、募っているのは白魔術使いではなかったり、雰囲気的に合わないギルドだったりして、断念せざるを得なかった。

オレが半ばあきらめ半分で人気の少ない裏道をとぼとぼと歩いていると、誰かが呼んでいるような声が聞こえた。

「おい、そこの君！」

その声にオレは後ろに振り返る。そこには長い金髪を後ろに束ね、動きやすそうな服装を着た活発そうな女性が立っていた。年は20代前半だろうか。

「君、よかつたらうちのギルド見てかない？ 見るだけでいいからさ！」

その女性はどこかのギルドの人のようだった。いつの間にやら、オレは半ば引きずりこまれるような感じで、そのギルドの建物に連れていかれてしまっていた。

そのギルドの建物は裏道にある、平屋建ての小さなものだった。関係者以外立ち入り禁止との張り紙が張ってある扉が少し気になったものの、オレは女性に応接間に連れて行かれ、案内された。

周りをすべて見渡せるほどの応接間には、狭いながらもソファーとテーブルがあったりとして、お客さんを迎えることは出来そうだけれども今、そこにはこのギルドに所属していると思われる人がくつろいでいた。

「あつ、自己紹介がまだだったね。私はこのギルド、『積もった山のサプリーダー』やってる、ニーリよ」

「ええ、どうも……」

「私達は「ボランティアギルド」と名乗って魔物の討伐だったり、お祭りのお手伝いだったり、事務的な雑用だったりと本当に様々なことをやっているわ。だから、新人者は悪党以外、誰でも大歓迎」

「そ、そうですか……」

「その女の子がルシアで、背が高いのがデイルで、メガネかけてるのがカーレイ。カーレイが一応、このギルドのリーダーをやっているのよ。メンバーはこれだけだから、顔と名前なんてすぐに覚えられるわ」

「あつ、はい」

ニーリさんの熱意がこもった説明に、オレは曖昧な返事をするこ
としか出来ずにいた。

「一応、とは何だ、ニーリ。全く、強引な勧誘活動をして。……失
礼、申し遅れた。僕は『積もった山』のリーダーのカーレイだ。ギ
ルド名が変なのは気にしないでくれ」

そこに、眼鏡をかけた真面目そうな青年、カーレイさんはニーリ
さんにきつく釘をさしている。

「えーっ、いいじゃない。このニーリさんのネーミングセンスを疑
うつもりかしら？」

「君が勝手に決めたことだろう。僕としては恥ずかしいぞ」

リーダーとサブリーダーはどうやら仲がいいらしく、何やら言い
合いを始めていた。

それが一段落したあとで、リーダーのカーレイさんがオレに話か
ける。

「君の名前をまだ聞いてないな。あと、何か得意なこととかはある
か？」

カーレイさんの口調は絵に描いたように真面目そのもので、厳し
そうな雰囲気だった。

「オレはリユードです。白魔術師を目指してますが、一応のところ
は剣の心得もあります」

オレは言葉を選びながら話したものの、剣の心得、とつい口走っ
てしまっていた。

オレはどうやら、白魔術より剣術の方が得意らしいのだ。実際に
昔は親のすすめで剣の道場に通っていて、今もたまに顔を出したり

もしている。

けれど剣士というよりも白魔術使いと言われる方がオレにとっては嬉しい。才能よりも、好きな事を職業にしていきたいからな。

そんなことが一瞬脳裏に浮かんだその時、カーレイさんが口を開いた。

「リユード、か。丁度白魔術使いを探していたところだ。二ーリも白魔術をかじっているが、人手が足りなくてな。君が良ければ僕たちは歓迎する」

答えは思っていたよりも快いものだった。あつという間に突き返されるかとも考えたため、オレは口をあんぐりさせて驚くばかりであつた。

「せっかくのボランティアギルドだしね！」

「そうだな。期待してるぜ、未来の白魔術師さん」

と確かルシアさん？ やデルさん？ も嬉しそうにしていた。

「どう、リユード。一同で歓迎するわよ。だからさ、このギルドに入ることを考えてみない？」

二ーリさんの言葉に、後を押されたような気がして、オレは素直に心のうちを言葉にしていた。

「オレがこのギルドの力になれるなら、喜んで入りますよ。それに、ここでも白魔術師の道は開けそうですよね。……では、これからどうか、宜しく願います」

きつとこの選択は正しかったのだろう。なんとなくだけけど、このギルドの雰囲気はオレの肌に合うような感じがしてきていた。

こうして、奇妙で愉快的な、オレのギルド生活は始まったのだ――。

第二話 深き森と妖精の謎（1）

オレ、リユードがギルド『積もった山』に入って一週間が経った。

「なあ、リユード」

「何だ？ デイル」

デイルの問いかけに、オレはけだるそうな声で答えた。

「暇だよな」

「ああ」

「もう、こんなに暇ならあたしたちニートになっちゃうよ！ リーダーズはいないし。仕事、仕事はないのー？」

ルシアも下の方で2つに分けて結わえた短い髪を揺らし、唇を尖らせた。ちなみに今、カーレイさんとニーリさんは仕事探しに出かけている所だ。

ギルドに入ったものの、ずっとこんなやりとりが続いている。

カーレイさん曰わく『積もった山』は零細ギルドで、仕事が滅多に来ないのだった。

これで大丈夫なのか、とツツコミを入れたいくらいのぐだぐだ具合だが、ニーリさん曰わく、いつもこんな調子らしい。ルシアが「また時間を無駄にしまったよ！」と言っのをオレが聞かない日があっただろうか。

このギルドに入って本当に良かったのか、と一週間前の期待していた気持ちを消したくなるが、まあ仕方ない。でもこの一週間で新入りのオレでも『積もった山』の人々と仲良くなれたからな。そんなフランクな雰囲気があるのだろう。

特にデイルとルシアは年が近いせいか、冗談も普通に言い合えるようになり、よく話していた。

それからしばらく三人で話していたところ、ギルドの事務所の玄関のベルがオレ達を呼ぶ音をたてた。

「カーレイ達が帰ってきたみたいだな」

と、デイルが落ち着いた、いつもよりも低い声で言うのと裏腹に、ルシアはすぐに玄関まで駆け出した。

オレ達もルシアの後を追いかける。

玄関にはカーレイとニリーではなく、長い黒髪で藍色のワンピースと髪と同じ色の羽織を着た、オレと同年くらいの大人しそうな少女が立っていた。

少女は派手な所はないが、整った顔をしている。こんな子を、オレは可愛いと思うのだけれども。

いや、彼女は大事な依頼人かもしれないだろう！と無理にオレは心を落ち着かせる。

「あの、ここがボランティアギルドですか？」

少女が問いかけた。

「ああ、そうだけど……」

オレは半ば緊張しつつ答えた。

「その、ギルドの皆さんにお願いがあるんです。この街から少し離れた所にある、森。そこには入り口付近にも普段滅多に姿を見せない妖精達が姿を見せているんです。よければ原因を突き止めるのに協力してください！……その森の奥は、危険だと聞いていますので……」

それだけ言うと、彼女は黙り込んでしまった。

「妖精？ お前、妖精のことが分かるのか？」

デイルは疑問のある様子だった。

妖精には不明な点が多い。　オレ達は勿論のこと、研究家でさえ生態がよく分かっていない生き物なのだ。

だから彼女が妖精と口に出した途端、この依頼は簡単には済ませられないと思った。　けれど、カーレイさん達の見解はどうなのだろう？　彼らを待った方がいいのだろうか？

「君の依頼に答えてあげたい所だけれど、今はリーダーが不在なんだ。　だから、もう少し待ってくれないか？」

オレがそう言うと、少女は一瞬残念そうな顔を浮かべた。　オレは少しだけ後ろめたさを感じる。

「あつ、ありがとうございましたっ！　また明日来ます！」

「待って！」

少女がそそくさと立ち去ろうとする中、ルシアが彼女を呼び止めた。

「キミの名前とか、まだ聞いてないよね。　よかったら、あたしらに教えてくれる？」

「えっと、ソアラ。　ソアラ・レイロットです。　黒魔術をやつてます——」

それだけ言うと、ソアラと名乗る少女は駆け出してしまった。

何てこった。　今じゃだいぶ雰囲気が違うけど、ソアラ・レイロットはオレの昔馴染みじゃないか。　しかもオレが白魔術師を目指す理由は、彼女に関係があるというのに——。

急な再会に様々な疑問が浮かび上がる。　けれども、その疑問はまだ解決できそうにはなかった。

ふと振り返るとディルがオレにささやきかける。

「今のソアラって子、ちょっとおどおどしてるけどけっこう清楚で

かわいいじゃないか。　ひょっとしてリユードってああいう子が好みか？」

オレはぎくりとする。　これ、一番言われたくないことなんだが、でも黙っている訳にはいけないので一応無愛想に返事を返してやった。

「好みつても、特にないしな」

「デイルにリユード、あたしの前で何話してるの？　今の話、ちゃんと聞いてたからねえ」

「げっ、ルシア。　お前に聞こえないようにしてたのに！」

今度はデイルが焦り始めた。　こういうの、自業自得って言っよな。

「あたし、女の子としてみられてなくてショックだったんだから！」

「それとこれとは関係ないだろ！」

「関係あるよ！」

いつの間にかオレは、その場から取り残されていた。

そのちよつとしばらく、後。

「にしても、森に現る妖精の謎をつかめ、か。　なかなか面白そうな依頼じゃねえか」

「そうだよな！　専門家ですら知らない妖精のことをこれで知れたら　きつとあたしたちつてすごいよね！」

ふたりとも、乗り気だなあ。　何というか、ムダにポジティブというか。　いつの間にか仲直りしてるし。

呆れるくらいだけど、オレも一肌脱いでみるか。　その前に、カ
ーレイさんや二ーりさんも乗り気にしてやろう！

第三話 深き森と妖精の謎（2）

「みんな、準備はいいな？」

カーレイさんが呼びかける。

そう、オレ達は依頼のためにこの街の近くの森に向かおうとしている。

カーレイさんとニリーさんが帰ってきてからのこと、オレ達は事情を説明したのだった。

幸い、カーレイさんとニリーさんは快く承諾してくれたのだが、カーレイさんは「きつとこの依頼、難しいぞ」と一瞬難しい顔を見せたっけ。

何しろ妖精だ。何故ソアラがそんなに妖精のことに精通しているのかもよく分からない。

それに7年ぶりに見たソアラは大分見違えていた。

昔はこう、オレが振り回されるくらいのおてんばぶりだったけど今はだいぶ大人しく、落ち着きがある。相変わらず人見知りな直つてないようだが、あんなことがあった後だし人は変わってしまうんだな。

その過去のことは、オレは今話せないし、思い出したくないことだ。けれどそれが彼女に傷を残して、オレが白魔術師を目指すきっかけを作った。それは確かなものだった。

街を出て、5分くらいの所に森の入口はある。

ここまでは街の外に住む魔物もおらず、冒険とは全くいえない、旅行の途中のようなものだった。

オレはあまり街の外に出たことはないが、時々外には好戦的な魔

物がいたりする。だから、街の外に出るのは安全とはいえないのだ。

「ここまでは楽勝だけど何が起こるか分からないからね、気をつけよ。ソアラちゃんも私達の同行者で、仲間なんだから。」

「わたしも皆さんの力になりたいから、頑張って手伝います！」

「じゃ、あたしが剣を振るって、けっこうピンチな時にはドカンと一発助けてね！」

「はい！」

オレが歩く後ろでは女性陣の声が聞こえる。カーレイさんは黙々と歩いていて、デイルは眠い目をこすっているせいか言葉を発していないけど、正直言っ、オレも眠い。

ギルドに来た時にニーリさんに寝ぐせを指摘されたし、オレも余裕なんてないんだ。

「だから敬語はいいって。あたしたち年近いんだし、ね」

「でもギルドで依頼を受けているからには……」

「そんなこと、気にしちゃ駄目よ」

つくづくニーリさんやルシアの社交性の高さは凄いと思う。女の子同士だからこそ和気あいあいとできるのだろうが、オレには全くわからない。

オレも、女の子と話すのはそんなに得意じゃないしな。

「ほら、あんたたちも起きる、起きる」

気がつくと、ニーリさんは半分寝ている状態のデイルに背中を叩き、起こしていた。

「それとも、これで目が覚めなかったら本気の平手打ちでいいかしら？」

「……それだけはやめてくれ」

デイルに返事をする気力はあつたらしい。

「リユードも平手打ちでいい？」

「遠慮しておきます」

確かニールさんは格闘技の心得がある。ニールさんの本気といったら、きつと恐ろしいものだろう。

そしてデイルは何か悔しいが男であるオレから見ても見た目こそは美青年なので、彼の顔が腫れていたら誰だって何があったか疑うだろう。

バシイン！と突然、紙が強い風に吹き飛ばされたような平手打ちの音が鳴り響く。 やってしまったよ、ニールさん。

「もう、デイル。 このぐらいなら、寝ている所をモンスターにやられるよりマシでしょう。 だから目を覚ます」

「はいはい。 さっきの平手打ちで目は覚めたぜ。 俺だって魔物に気づかないくらい無防備じゃないしな」

「そうはいつでも、心配なのよ……」

オレの気のせいであろうか、過激だとはいえニールさんはデイルのことを特別気にかけてるような気がする。

「何ぼーっとしてるの、リユード」

「何でもない」

「そうすると、また眠くなっちゃうかもよ？」

「わかってるっ」

オレの考えが読めてないといいけど。この人は何か人の考えを読むのが得意そうだし。

「あの、皆さんいいですか？」

ソアラが小声で言ったことに、オレ達は初め気づかなかった。

「ソアラがなんか、話したいってー！」

ルシアがフォローして、ようやくみんなはソアラの方に振り向いた。

「今から、案内役の妖精を呼び出したいと思います。 ここで見たことは、内密にお願いします」

この時のソアラは凜とした表情だった。

「分かった。それだけ僕達のギルドを信頼したということだな。何も言わないでおく」

カーレイさんが承諾した。

「皆も誰にも言うなよ」

そして、オレ達に念押しをした。周りも頷く。

秘密を守るのはギルドの掟での絶対条件だ。だから口を固くしていないと、ギルドではやっていけない。

ソアラが呪文を唱える。呪文に合わせて、ソアラは手に持っていたワンドで幾何学的な模様を描いた。

すると、幾何学模様が光り出し、光が消えた時には妖精が姿を現していた。

「ソアラ、我を呼んだのはあの者達のためなのか？」

「ええ、そうね」

出てきた妖精は4等身ほどの人を小さくして、蝶の羽を付けたような姿をしていた。

見た目は少女のように見えるが、喋り方は独特でプライドが高そうだった。ソアラも、妖精とは素で接している様子だ。

オレもそうだけど、周りを見渡すとみんなは初めて見る妖精に感激し、目を輝かせていた。

「その妖精は何処に住んでいるのだ？」

カーレイさんがソアラに尋ねた。

「えっと、ずっとわたしと一緒にです。名前はカティといいます。

けれど、わたしが外に出る時には人に見つからないよう隠れているので、こうやって呼び出さなければなりません」

「なるほど...。では、森に行っても姿を隠しているということなのだな？」

「はい。でもカティは妖精の大群が森の奥へ向かっていた、と言っていました。それがわたしの聞いた話です。」

「我は確かに見たぞ。だが、我が同族が向かった場所は、禍々し

い雰囲気であった。人間に見えてなくとも、我には見えておるぞ。

「多分、ソアラもカティも嘘はついてなさそうだけどな……。」

「ますます難しくなってきたね。」

ルシアは首を傾げる。

「皆さん、ごめんなさい。こんな難しい依頼をしてしまって、あと今になってからじゃないと妖精のことを詳しく説明できなくて」

「いいんだぜ、そのくらい」

珍しくデイルは素直だった。

これからオレ達は森に向かう。妖精の事情も分かったが、あとは森の中でないと分からないだろう。森の奥では、何が待っているのだろうか――。

第四話 深き森と妖精の謎(3)

オレ達が森の中に入り、砂がむき出しになった道に沿って歩いてゆくと一つの看板が見えた。その看板はぼろぼろで所々風化していたが、書いてある文字はなんとか読めた。

「『右側危険!!』だって。なんかありがちな看板だね」

「やはり右側には何かあるのだろう」

ルシアの緊張感のなさに対して、カーレイさんはいたって冷静だ。

「ここはさ、やっぱり右側に行ってみようよ!」

「た、多分そうですよ。妖精はそっちにいそうです。で、でもこっちに行つて無事に帰つて来れるのでしょうか……?」

ソアラも躊躇いつつ賛同した。昔の彼女は冒険好きで、よく危険な所に足を突っ込んだっけ。それでついてきたオレも怒られるのが日常だった。

『あの事故』は元々彼女の冒険がきっかけとなつていただけで、彼女はそのトラウマを乗り越えてでもこの事件を解決したいのだろう。雰囲気が変わつたつて、根本的な部分は変わつてない。

「確かに、禍々しい雰囲気はこちらの道の方が強くなつておる」

カティも姿を見せて、順々に分かれ道を見渡した。

「じゃ、決まりだな」

カーレイさんは右に進もうとした、が。

「ちょ、ちょっと待つて!この奥には何か出そうじゃない!!」

ニーリさんは必死にカーレイさんの腕にしがみついて、看板の近くまで引きずりこもうとしている。

「落ち着け、ニーリ」

「で、でも心の準備が……」

「ニーリさんって幽霊とか苦手なんですか?」

明らかに怖がつていそうだったので、一応オレは聞いてみた。
「ち、違うわよ！ リュードって意外と意地悪なのね！ さっ、右に行きましょうー！」

どうやら凶星だったらしい。これほどに落ち着きのないニールさんは初めて見た。ニールさんはそっかしいように見えるが、冷静さも併せ持っている。

もしかして、実際あまり街の外に出たことがないのだろうか？

「やれやれ。幽霊は僕達がなんとかするからな」

「お願いするわっ。あんなパンチやキックが効かない得体の知れないもの、相手に出来ないもの」

「全く……」

そうしてオレ達は右側の道を進んだ。

道は奥に進めば進むほど、明るさを失って木が密に生い茂るようになる。

しばらく歩いていくと横の茂みが音をたて、何かの影が見えた。

森の中は薄暗く、影は遠かったたのでその影が何なのかはまだ分からなかった。

「何？オバケかしら！？」

「幽霊なんて多分まだ昼だから出ないだろ」

「そうよね。安心したわ。ありがとね、デイル」

さっきの一件から、ニールさんは幽霊に警戒していた。オレもちょっとからかい過ぎたかな。

茂みの音は次第に大きくなってくる。そして影ははっきりとした形を現す。

そしてその正体はキノコを大きくしたような魔物だった。キノコの魔物は、いかにも戦闘体制だ。

「美味しそうなキノコだね！」

「きつと食べても美味しくないし、毒があるかもしれないよ?」

「毒があるかどうかなんて、調べないとわかんないじゃん」

「誰が調べるのよ……」

ルシアの脇目を考えないボケに、ニーリさんは呆れていた。と
いうか、こんなにのんきで大丈夫なのか、女性陣?

「げっ! 俺こんな魔物見たことないぞ!? キノコの魔物はもつ
と小さくて大人しい筈だ! だが、十分気をつける!」

「分かっている。お前もな、デイル」

「調子は乗らないぜ、リーダー」

「皆、武器を構えろ!」

一方で男性陣は緊張感を持って戦闘体制を作ろうとしている。

カーレイさんとデイルの指示により、オレ達は一斉に武器を取り出
した。でも何故デイルが仕切っているのだろう?

オレが使うのは護身用のレイピア。一応実戦経験もあるし、あ
まり怖いとは思わない。

デイルは槍、ルシアは剣、ソアラは杖、ニーリさんは箆手、カー
レイさんは投げナイフを構える。

「アタシよりほっそい剣使っちゃって。情けないの」

「オレの志望は白魔術師だ! だから基本はお前らのサポート!」

「アタシの剣にかかればサポートなんて無意味、無意味」

「万が一のことを考えろ! 自信ありすぎだ!」

「つべこべ言わずに戦え! 特にルシア、調子に乗るな!」

「分かっているよー」

ルシア、棒読みだろ。と、それはともかくデイルの一括により
オレは巨大キノコに向かってレイピアを構える。

構えながら仲間の様子を見ると、カーレイさんとソアラは黒魔術
の詠唱を始めていた。

白にしる黒にしる、魔術を使うには魔法言語による詠唱が必要だ。
だから裏を返せば、詠唱に集中出来るような状況でないと、どん
な魔術だって使えないってことだ。

今は白魔術を使うような状況ではないし、オレはキノコが誰を狙っているのかを見極める必要がある。

キノコも、オレ達の様子をうかがっている。しかし、キノコはカーレイさんがぶつぶつと術の詠唱をしているのを見るとすぐに、カーレイさんの方に向かっていこうとした。

これは、キノコの動きを食い止めるべきだな。そう瞬間的に判断してオレはキノコの進路を阻んだ。

オレは装備していた盾で攻撃から身を守ると、キノコは一瞬訝しげな顔になる。その隙にオレは一発、レイピアを振るった。

「やべっ！もしかしてあまり効いてないのか！？」

オレは無意識のうちに言葉が出た。

キノコの軸には、かすり傷ができていただけだった。

「リユード。俺達に攻撃は任せとけ。お前はとりあえずその持ち前の盾で身を守ることを考える」

「そうだな、デイル。頼むよ」

そうしてオレは適当な間合いを考えて、キノコの攻撃に備えた。

その頃ソアラは術の詠唱が終わったらしく、杖を上に掲げている。すると、どこからか吹いていた風は目に見えるような刃となり、キノコに向かってかさを切り裂いていった。どうやら、かさが弱点だったようだ。

「かさを狙っていいいいんだね！」

「そういうことね」

ニーリさんとルシアはキノコの方へ向かってゆく。そしてキノコのかさに攻撃を当てようとした。

しかしどうやら、キノコの様子はおかしい。キノコは縮こまって、体をぶるぶると震わせていた。

「ニーリ、ルシア、危ない——」

デイルが注意を促した時にはもう遅かった。キノコは既に毒々しい色の胞子を近くに撒き散らしていた。

ニーリさんは軽装備のためなんとか避けられたが、ルシアは避けきれずに直に胞子を受けてしまった。

「もう、あたしはだめだよ。あのキノコ、毒キノコだったんだね……」

ルシアは大分弱っていて、足取りもふらふらしている。あの胞子に触れると毒を受けるのだろう。

「気づいてない私達が悪かったわ。変わった所を教えてくださいませんか、デイル。」

「まあ、ニーリは無事で何よりだ。でもルシアがな……」
「ルシアのことなら、解毒はオレがやってみる。オレは何も出来なかったから、出来ることはしたい」

そうは言ったものの、白魔術を人に対して使うのは初めてだった。とりあえず基本的な呪文は知っているけど、上手くいくかどうかは分からない。

ここからが、正念場だな……。

第五話 深き森と妖精の謎（４）

オレは精神力が続く限り、ルシアに向かって白魔術をかけるために集中した。横でカーレイさんが術を唱え終わり、巨大な風船がはちきれるような爆発音が聞こえ、焦げ臭いにおいがしたような気もするが、そんなことには構ってられない。

やつのことで解毒の呪文を唱え終わると、淡い緑色の光がルシアに向かって放たれた。

それでも、ルシアはまだ立っていないようだ。

「やっぱりオレの野暮な魔術じゃ駄目だったか……?!」

オレは呟いた。

「あつはは。駄目じゃないよ？騙された？」

ルシアは顔を下に向けたままだ。だけど声は確かに、今は弱々しいものの高らかなルシアのもだった。

「……ルシア？」

「勝手に殺さないでよ。まだちょっと、ふらふらするけどこのくらい平気なんだから」

ルシアは顔を上げる。顔色はまだあまり良くないようだが、とりあえずは大丈夫そうであった。

「すっかり騙された。いくらなんでも無茶苦茶すぎるじゃないか。身のたけを考えろよ」

「あたしも、ちょっとムチャして、悪かったと思う。ごめんね、リユード。わざわざ解毒なんてしてもらっちゃって」

ルシアが素直に謝るということは、オレにとって予想外であった。もっと強がるんじゃないか——オレはそう思ったが、街の外に出てルシアなりに気を遣っているということなのだろう。

「ルシア、無事か」

カーレイさんの声が聞こえる。

「あたしなら大丈夫！」

ルシアは座ったまま笑顔を向けて、カーレイさんに手を降った。
「リユード、ルシアの解毒、ご苦労だった。立てるか、ルシア」
「うん、多分」

ルシアは立とうとする。立ち上がった時に少しふらついて、カーレイさんはルシアに手を貸した。

「キノコは僕の術で倒しておいた。デイルはキノコを調べている筈だ、何かあるかもしれないからな」

「ありがとうございます。迷惑かけました」

オレはカーレイさんに軽く礼をすると、倒れているキノコの方へ向かう。

オレ達の目に見えるキノコは、もう既に魔物ではなかった。

「おつ、リユード。キノコの魔物はただのキノコになっちまった。めばしいものもないが、怪しげな黒い石を見つけた」

「カテイ、この石は何かの魔力が込められているのかしら？」

「この雰囲気……。森全体から出ているものと同じだ。自然とともに暮らす者を惑わすもの——そう考えるのが妥当だな」

「じゃ、この黒い石のもつと強力なものがこの森のどこかにあるということだな？」

腕を組んで考えるデイル。

「そんな石、私が叩き割ってやるわ!!」

「ニーリなら、きつと壊せるさ」

「私に馬鹿力があるように言わないの、デイル」

「馬鹿力なら俺は何度も見てる」

「どうやらデイルとニーリさんは割と付き合い長いようだ。今までのかけ合いを見てきて、そう思えた。」

「ささ、奥に行こうよ!!」

ルシアがせがむ。

「あの……、その黒い石、持ち帰って調べてもいいですか？」

「あまり調べるには良くない。ただ、ここに放置しておく訳にも

いけないだろ。調べ終わったらちゃんと壊しておくのを忘れるな」
「あ、はい」

ソアラは石を心配している様子だった。

そうしてまた、オレ達は森の奥へと歩いていくのであった。
道中では魔物を何匹か見かけたが、あまり手こずらずに倒せてしまった。

そしてオレ達の目に映ったのは、明るい光がさしている場所が見えている光景だ。

「出口……？こんな所にあつたのか？」

カーレイさんは疑うような目で考えている。

「何かあるかもしれないわね」

もしかしたら、妖精失踪の原因もわかるかもしれない。オレはその考えに賭けるしかなかった。

そんなこんなで、オレ達はその光の方向に向かう。

待ち受けていたものは、ただの行き止まりの広場。
しかし、そこには大きな泉があつた。

「まあ、綺麗な泉ね！」

ニーリさんは手を一度パチンと叩き、目を輝かせている。

「妖精が住んでそうだよ！」

ルシアも興奮した様子だった。

「あの、落ち着いてください」

そんな中で、ソアラは冷静なままであった。

「何か、良くないものを感じます……」

「そうだな。 なにか悲しげで、怒りを抱えた、負の感情のようだ」

カティがそう言うと、泉は突然渦を巻いた。

オレたちが見たのは、人のような人ではないような、何かがゆらめいている影だった。

第六話 深き森と妖精の謎（5）（前書き）

少しだけ展開変わりました。

それにあたって第五話も少しだけ修正。

第六話 深き森と妖精の謎（5）

オレ達が泉に出来た渦に氣をとられていると、ソアラはカティの元で冷静に周りを見渡していた。

「何か分かった？ カティ」

「確か、ここには妖精が慕う女神様がおるのだ。この渦の中にはさつきの石とは違うが、何らかの“氣”がある。それが良からぬ氣配の原因だ」

「“氣”とは何だ？」

初めて聞く言葉に、首を傾げているカーレイさん。オレも、聞いたためしがない。

「簡単に言くと、私達が使う魔術に影響を及ぼす空気の流れです」

ソアラはそう言ったきり、後ろを向いた。ソアラの目線の先には、木々が広がっていた。

「たくさん妖精が、見えてきます——」

森の奥から、沢山の妖精が姿を現す。それは、泉の周りの空を埋め尽くしてしまいそうな数であった。

妖精は次々と泉のほとりに降り立ち、その多くは泉の渦に向かっていく。

その者達、何をしとるのだ？

泉の神様が悲しみになっっているのです。だから、私達が生け贄になつて悲しみを静めなければ……

カティが何やらよく分からない言語で近くの妖精に声をかけている。

「あいつら、何喋っているんだ？」

デイルがオレに囁く。

「さあな、オレも分からない」

オレは上の空の調子で答えた。

「あの、それは妖精言語です。カティ、訳せる？」

「うむ。さっき言った泉の女神様が、何らかの原因で森が枯れかけていると悲しんでいるようなのだ。そのために、妖精達は生け贄になって森の存続につとめようとする。」

「何で神様は悲しんでいるのかしら？ それに、妖精が犠牲になるって……」

腕を組んで、考えるニリーさん。

「もしかしたら、さっきのキノコが持ってた石と関係あるんじゃないのかなあ？ ソアラ、その石、出してもらえる？」

ソアラは服のポケットからキノコが持っていた石を取り出し、ルシアに渡した。

すると、泉の渦はさらに勢いを増し、その渦から白い衣を身にまとった美しい女性の姿をした泉の神様が現れた。

「あれが、女神様なのか？」

驚きに目を丸くするディル。

「僕も、初めて見た。神話で見えるような、水の精霊、まさにウンディーネそのものだ——」

「……私は、ウンディーネという名ではありませんわ」
女神様が口を開いた。

「この泉から、森を見守っていたのです。けれども、その少女が持つ石のように、この森の“気”を狂わせるものが多くなっていきましたわ」

「やった！ ビンゴだよ！！」

「それがどうした」

「さっすがあたしじゃない？」

「良かったね」

どうやらルシアの推測が当たっていたようだ。多分彼女のことだから適当に答えたんだと思うけど。だからオレは適当に受け流してやった。

「……そう。 同じような石が幾つか、この森にあつて森の“気”を悪いものになっている。 だから、“気”を多く持つ妖精達を犠牲にしないとこの森は次第に枯れていくわ！ ……許せるものでない」女神様の目は怒りと悲しみに満ちていた。

「…先ほどは、失礼致しました。 一つ、聞きたいことがあります」カールレイさんは眼鏡を上げて視線を女神様に向ける。

「“気”というのは森の存続に関わっているのでしょうか？」

「ええ、そうよ。“気”は、あらゆるものが持つ、この自然の源。

……これくらいでいいわね。 おしゃべりはここまでにしておきましょう」

「じゃ、早速その石とやらを壊しに行こうぜ！」
デイルが先導する。

「カティ、この石と同じ気を探しましょう」
ソアラはルシアが持つ石を見つめていた。

それからのこと、オレ達は森中を駆け巡って石を探した。
意外と石はカティのお陰もあつてか探すのに手こずることはなかったが、それでも石を集めて、全ての石を壊し終わると既に日は夕方になっていた。

「疲れましたね」

オレが横を向くと、そこにはソアラの瞳があつた。

「ああ。 ソアラも、お疲れ様」

「リユード君」

「何だ？」

「……久しぶり、ね。 私のこと、覚えてる？」

「そりゃまあ、覚えてるさ。 ……あれから、随分経つたんだな」

「このギルド、『積もった山』にあなたがいるのを見たときは、本当にびっくりしたのよ？」

本当に偶然だったようだ。 ソアラの表情はどこか懐かしそうである。

「私、緊張してて言葉に詰まってたけど、リユード君なんだって、分かってた。 …… あなたは全然、変わってない。 自然なまま、そんな気がするのよ」

「オレはなんとなく毎日を過ごしてきたからな」

身長もあまり伸びてないし。 そう言おうとも思ったが、やめておいた。 今もあまりソアラと背が変わらないのは、悔しい気もする。

「…… ソアラは随分、見違えたな」

「ええ。 …… 変わらざるを、得なかったの」

昔のソアラは癖のない黒髪をルシアくらいの肩にかかる長さに切りそろえて、服装も女物を好まなかった。 今とは、全然雰囲気が違う。

僅かに暗くなったソアラの表情に、オレは何も返せなかったが、その時。

「へえーっ！ リユードとソアラって、幼なじみだったんだー！」
目を輝かせるルシア。 オレはソアラの話を聞いていたためすっかり忘れていたが、どうやら全て聞かれていたようだ。 デイルもニーリさんもカーレイさんも、皆こっちを見ている。

元はと言えば、話し掛けたのはソアラだ。 そういうことなら、ソアラに言ってくれ！ オレはそう一瞬思う。 だけどもあ、仕方ない。

「後で昔の話、聞かせてね」

ポン、とルシアはオレの肩を叩く。

「私も聞きたいわ、その話」

ニーリさんも便乗した。 やれやれ、面倒なことが増えそうだ。 また後で、話すことにしよう。

さて、その後だ。

オレ達一行は女神様に報告に行った。

「まあ。 禍々しい気はすっかりなくなりましたわ。 これで、この森も暫くは大丈夫でしょう。 私はここを動けないし、妖精達は石を壊せない。 だから、あなた達の働きに、感謝しているわ。 私はあまり人前に出たくなかったのだけれど、 あなた達の“気”には、信じられる気がしたのよ」

女神様は胸のあたりで手を組み、安堵感に満ちた表情になった。

「信じられる、とは。 何とも恐れ多いお言葉です。 …… 僕達は何か、違うのでしょうか」

「あなた達は邪念のない、真っ白な心を持っているわ。 “気”は、その人の心も分かるのよ。 …… カーレイ君」

女神様は悪戯めいた表情でカーレイさんにささやいた。 でも、何故名前を知っているのかは分からない。

「どうして僕の名前を…？」

やはり突っ込み所はそこか。

「それは秘密よ。 でもその皆の名前も分かるわ。 ソアラさんにリユード君。 ルシアさんにデイル君にニーリさん。 あなた達は森の恩人なのよ」

面々と顔を合わせる女神様。

「すごい！ あたし達の名前がわかるんだ！ 流石は女神というだけあるね！！」

「そうね、ルシア。 わたしもすごいと思った。 …… これで、妖精失踪の原因が分かってひと安心したわ」

この小さな旅で、ソアラもすっかり面々と打ち解けた様子だった。「ソアラさん、あなたは妖精達と随分仲良くしているようね。 これで、妖精達も元の場所に帰ろうとする筈だわ。 だから、もう心配しないで」

「はい。 ありがとうございます」

そして、朝来た道を辿って帰路に着く。

ソアラともこれで別れるんだろうか。　そう思うと少しだけ物寂しい気持ちに駆られた。

「あの……。　カーレイさん、皆さん、お願いがあるんです」

その瞬間、ソアラの声が聞こえた。

「何だ？」

「わたし、このギルドを今日見てきて、ここのギルドで働きたいと思ったんです。　もうすぐ16歳になるのでその時はこの街に戻って、ギルドに所属しようと思っていました。　：『積もった山』の人々は、優しい人ばかりですから」

その言葉を聞いた時、オレの心の中の名残惜しむ気持ちはどこかに消えてしまったようだ。

「あの、……。駄目ですか？」

「皆も、問題ないな？」

心配そうなソアラとオレ達に向かって振り返るカーレイさん。

「やった！また人員ゲットしたわ！」

「あたしも歓迎するよ！」

「いいんじゃないのか？」

皆の反応は良さそうだった。

「リユードは、どう思うか？」

カーレイさんの声に我を戻すオレ。　ちよつとぼーっとさていたらしい。

「オレも、ソアラがいると嬉しい」

……。　言って後悔した。　何てこと言っただんだオレは！　あいつはただの幼なじみじゃないか！！

熱くなりそうな顔を見られたくなくて、オレは皆にそっぽを向けて早歩きで歩き出した。

「べ……。別に何でもないから気にしないでくれ！」

「それは気にしないけど、わたしは嬉しかったよ？」

オレを追いかけて、微笑みかけるソアラ。

「だからこつち見るなって！」

「じゃ、わたしは前を見ることにするね」

「そうしてくれ」

「若いつていいよな」

「リユードったら可愛いわね」

少し離れた所からカーレイさんとニーリさんの声が聞こえたような気もするが、オレは必死でスルーしようとした。

またギルドに人員が増えて、どうやら今後はさらに騒がしく、面倒になっていくだろう。

こうして、オレのギルド生活は続いていくのだろう。

第六話 深き森と妖精の謎（5）（後書き）

お久しぶりの後書きです。

シリアス過ぎないように物語を引っ張るのが大変でした。

ここで、ギルドびとの第一部が終わるという訳ですが、まだまだ先は長いです。

次回は、登場人物紹介をしたいと思っています。

また、しばらくは小話テイストになる予定です。

本筋にしましては、少しお待ち願います。

夕霧ありあでした。

登場人物、用語について

第一部が終了したので、ここで『積もった山』のメンバーについて軽く紹介しようと思います。『積もった山』は基本的に女性陣が強いです。

第一部時点でのネタバレが僅かにあるのでここから読み始める人は気をつけてください。

また、読みたくなければ飛ばしても全然構いません。
用語についても念の為此で解説します。この用語なんだと思っ
たらここを見ることをお勧めします。

〈主な登場人物〉

リユード

16歳、166cm、A型

一人称・オレ

特徴・紺の短髪。少しハネている部分がある。紫の目を持つ。

職業・白魔術使い

使用武器・細身剣

この物語の主人公にして語り手。 積もった山のサブリーダー、
二ーリによって半強制的に積もった山に加入することになる。

礼儀正しく向上心が強いもの、羽目を外す時は外す。そんな性格
もあってか積もった山のメンバーに突っ込みを入れることも多い。

過去のある事故がきっかけで白魔術師を目指すようになる。自身
は白魔術よりも剣術の方を得意としているが、あまり積極的に剣術
を使おうとは思っていない。

ちなみに、恋愛関係は不得手。

ソアラ

15歳（後に16歳）、161cm、AB型

一人称・わたし

特徴・黒髪ロングのストレート。前髪もやや長い。目はこげ茶。スレンダーである。

職業・黒魔術使い

使用武器・ワンド（片手杖）

積もった山に仕事の依頼をした少女。リユードの幼なじみで、7年ぶりに再会する。

人見知りが激しいものの、実際は好奇心旺盛で明るい性格。落着きがあり、非常に芯が強い。今でこそおしとやかだが、昔は男勝りでお転婆だった。

何故か希少種である妖精に詳しく、カティという妖精を連れている。黒魔術の心得もあり、黒魔術師を志す。

ルシア

17歳、152cm、O型

一人称・あたし

特徴・紫のかった赤毛。ミディアムヘアを下の方で二つに結わえている。青のたれ目。

職業・剣士

使用武器・片手剣

明るく元気な少女。リユードのケンカ友達にして『積もった山』のムードメーカー兼トラブルメーカー。悪気はなくとも思った事は何でも口にする。非常に感動屋。

その愛嬌のある性格から男女問わず親しまれているが、恋愛対象に見られないのが悩みの種。

我流の剣技を使う。調子に乗らなければ実力はそれなりにある。

デイル

20歳、183cm、B型

一人称・俺

特徴・銀髪でしなやかな髪。青の流し目。すらりとしている。

職業・槍使い

使用武器・槍

槍使いの青年。長身で美形のため女子にモテる。

リードとは馬が合うためか親しくなる。また、ニリーとは『積もった山』が出来る前からの知り合い。

基本的にはクールで無気力なように見えるが魔物の生態に詳しく、戦闘ではリーダーシップをとれる。

何を考えているのかはよく解らない人物。

ニリー

24歳、167cm、B型。

一人称・私

特徴・金髪を後ろのほうで一つにして結わえている。

職業・格闘家

武器・箠手

『積もった山』のサブリーダーにして名付け親。

活発な女性だが、けっこう強引。ただ、少しそっかしい所も。

女性でありながらも格闘センスがある。また、白魔術を少しかじった程度であるが使うことが出来る。

幽霊みたいな格闘技が通用しない得体の知れないものが苦手。

カーレイ

25歳、174cm、A型

一人称・僕

特徴・緑の髪を知的に見えるように切りそろえている。かに目の眼鏡をかけている。

職業・黒魔術師

武器・投げナイフ

『積もった山』リーダー。

生真面目かつ合理的で、自分にも他人にも厳しく接する。そんな性格もあってか、『積もった山』の中ではかなり堅い人物。

未知の知識を蓄えようと試みており、妖精にも興味を抱く。プロの黒魔術師の資格を持っている。

〈用語解説〉

ギルド

リユードが住む街で栄えている職業団体。国も存在は認めている。法律によって規律は整えられているが、基本的には自由度が高い。

商人ギルドであったり、職人ギルドであったり、冒険者ギルドであったりと、ギルドの種類と構成員の職業は千差万別。

加入資格は一律に16歳以上であるが、追加条件があるギルドもある。

『積もった山』のメンバーは戦闘もできるものの、基本的に『積もった山』はボランティアギルドであり、人助けなら何でもすると銘打っている。

魔術

“気”と術者の精神力、それと呪文によって成される奇跡の力。習得には勉強が必要であるため、魔術使いは概して頭が良い。

白魔術

主に傷ついた人を癒やす為に使われる魔術。

黒魔術

自然の力を借りて様々な現象を起こす魔術。

白（黒）魔術師

国家から認められた白（黒）魔術使い。要するに、その魔術の口である。白（黒）魔術師でないと扱ってはいけない魔術も存在する。

“気”

魔術の発動に必要なもの。この自然にあるあらゆる者が持つ。エリア内の“気”の流れで有利な術も変わる。

“気”の存在は人にとっては発見されたばかりで謎が多いため、研究する者も多い。ただし、人は“気”をあまり感じることが出来ない。

魔物

主に人の住まない所に生息する強い“気”を持った生き物。

人に害を及ぼすものもあれば、無害のものもある。

妖精

魔物の一種。普段は人目のつかない所で生活している。目撃者は非常に少ない。

独自の言語を使いある程度の魔術を使うことから、知能は非常に高い。

“気”の流れを読み取ることが出来る。

く世界観についてく

リユードたちが住む街、ディベルクは、西洋風で木造建築や石作りの家屋が立ち並ぶ。

魔術をベースとした技術が人々の暮らしを豊かにしているが、その技術に魔術をかける魔術師とギルドが不足しているのが問題。

街の治安は悪くはないが良くもないため、夜にディベルクを歩くのは注意が必要。

第七話 積もった山の大掃除（1）

「皆さん。……あの、『積もった山』は掃除をするべきだと思うんです」

……これが、全ての始まりだった。ソアラが『積もった山』に入ってからすぐに言った言葉である。

『積もった山』の事務所は玄関、ロビーといった表向きはきれいだが、「関係者以外立ち入り禁止」と暗黙の了解になっている部屋——すなわち、従業員室の散らかり具合はひどかった。その散らかり具合とギルドの依頼客の少なさから、専らロビーが憩いの場となっていた。ニーリさんはこういったことになるのかと予測して『積もった山』と名付けたのかと疑いたくなる。

それにソアラ、相変わらず他人に慣れたら思ったことは言うんだな、とオレは思う。だから、『積もった山』の能天気な連中とも上手くやっていけるのだろう。もつとも、オレは女性陣の勢いに圧倒されているのだが。

「良い心がけだな、ソアラ。ギルドの人員も増えたし、従業員室はいつかちゃんと掃除をするべきだと思ったんだ。このままじゃ本当に積もった山どころじゃなくなるな、デイル」

カーレイさんが足を組んで何やら偉そうな感じでロビーにあるソファーに座っているデイルの方に腕を組んで上からの視線を向ける。「えー。何で俺の方に視線を向けるんだよ、カーレイ」

デイルはというと、そつぽを向いて不機嫌に返事を返し、全然やる気がなさそうだった。

「大体、あの部屋が散らかり始めたのはお前のせいだろう」

「そんなもの知らねえよ」

「魔物のメモやら槍の戦闘技術書やらは、どう考えても持ち主は明

らかだ」

「はいはい。そんな物持つてるのは俺しかない、って言いたいんだろ」

「そう言った所だろう」

説得を続けるカーレイさんだが、まだデイルは納得してない様子だ。

「デイルさん。掃除、したほうが後になって困りませんよ」

そこにソアラが微笑んで追い討ちをかけた。彼女の黒髪に魔が潜んでいるように見えたのはオレの気のせいだと信じたいが、現実を受け入れなければいけない時もあるんだ！

「ソアラも厳しいな……。でも、俺も後で困るかもしれないな」

ソアラの魔力、恐るべし。黒魔術を使っていないのに使っていたような気がした。もっとも、本来の使い方ではないと思うが。オレ達の世界の魔術は、黒だから悪いということではないし。

「デイルの本性がこんなならしなかったら、あなたの事が好きな女の子たち幻滅しちゃうわよ。ね、ルシア」

「うん。その通りだよ」

ニーリさんとルシアがとどめを刺した。オレはというと、今の流れを何も言わずに突っ立って見ている。どうやらオレの出番はなさそうだ。大人しく引っ込んでいよう。

「分かったから、掃除すればいいんだろ？」

「ルシア、ニーリ。君たちもだ。分かっているな」

突如としてカーレイさんがルシアとニーリさんの方を向いた。

「分かってるよ、リーダー」

ルシアが意外と真面目なことに驚くオレ。彼女はいかにも掃除をサボりそうなタイプだが、やることはちゃんとやるのか。

「私も、掃除は苦手なのよね……」

「あたしが手伝うからさ、ちゃんとやろうよ！」

「みんなでやった方がいいですよ」

ルシアがニーリさんを引っ張り出した。それにソアラが便乗している。

「……で、リユードは何ぼーつとしてるんだ？ まさか、俺を差し置いてサボろうなんて思ってたんじゃないよな？」

さりげなく大人しくしていたオレに、デイルはようやく気がついたようだ。

「この流れでサボろうなんて思った方が危険だ。後になって怖い。きつと後悔するな。……それに、オレが出る幕はなかったんだ」

「なるほどな」

「だから、さつさと終わらせよう」

「そつだな」

こういった訳で、オレ達は従業員室に足を踏み入れた。実際オレは2、3回入ったこともあるが、目的は資料を探すためであった。でも、今回は違う。掃除をして、資料やらを整理整頓するためだから、気も自然と引き締まる。

何というか、カオスという言葉がすごくしっくりくる空間であった。

「前々から思ってたけど、いくらなんでもこれは酷いよね……」

ルシアはこのカオスな空間に、あきれ半分の様子である。

「ほら見てみる。ほこりも所々に溜まっている」

カーレイさんの言葉に従って、オレはあたりを見回した。やはり、散らかっているだけではなかったか。

「皆、とりあえずこの散乱している物質をゴミと必要なものに分けて、箒で部屋中を掃け！ 僕たちの敵はこの部屋全体だ！！」

カーレイさんの目が本気になった。この部屋は魔物と同レベルか。

「ラジャー！」

カーレイさんに向けて、ニーリさんがびしつと敬礼する。

「オレ達も敬礼しようぜ」

「そうだな」

オレはデイルにこつそり相談したが、意外と乗ってくれたようだ。

「アイアイサー！」

「了解です！」

ルシアとソアラも敬礼した。だからなんなんだこのギルドのノリの良さは。

オレは箒を持ってきて、とりあえず散乱している物たちを脇に固めた。

脇目では、ルシアとソアラが会話しているのが聞こえる。

「ねえソアラ、この箒に魔術をかけたら空を飛べるかなあ？」

「風の黒魔術を応用すればいいかもしれないわね」

「いいなあ。あたしも勉強できないバカじゃなかったら黒魔術習ってたのにな！」

「私はルシアみたいに剣をうまく使えるのに憧れるわ」

「じゃ、どっちもどっちってことだよな」

「ふふふ」

夢見がちなのか現実的なかは分からないが、聞いているぶんにはほのぼのとしている。

「ねえ、リユードもさ、魔法の箒欲しいよね」

ルシアは楽しそうに掃除をしながらオレに聞く。

「そうだな。そんな物があつたら面白そうだ。だけど、空を飛ぶよりも箒が勝手に動き出して掃除してくれたらいいと思うんだが？」

「リユードは夢がないねえ。もっと夢のあることを考えようよ！」

その考えはルシアにあつさり否定された。そんなに夢のないことなのか？

「わたしはそれも夢があると思うわ。だって、物に命を吹き込む魔術なんてまだ発見されてないもの！」

ソアラは、とりあえず賛同してくれたようだ。

「面白そうなこと話してるわね」

ニーリさんが話に参加してきた。彼女は書類の山を抱えている。
「ねえサブリ、サブリだったら魔法の筈、欲しい？」

ルシアはニーリさんのことをサブリと呼ぶ。何故そうなのかと聞いてみたことがあるが、サブリーダーだと言いつらいかららしい。
なんだ、そういうことが。

「そんな物があつたらいいわね。でも、リユードの考えの方がいいと思うわ。だからさ、リユード。命吹き込む魔術開発してみたら？」
「オレには無理ですよ」

「『やれば出来る』って言葉、知らないの？」

「誰も確立してないんだつたら無理ですよ！ ニーリさんが考えてくださいっ」

オレに顔を近づけてささやくニーリさんに少しどきりとするが、それでも無理なものは無理だと思うのでしごとく反論した。

「私は本業が格闘家だから無理よ。魔術は触りしかやってないし」

「じゃあまだ白魔術師にもなっていないオレに頼まないでくださいよ」

「じゃあ、頑張つて白魔術師になりなさい」

ニーリさんは一步も引く気はなさそうだ。でもオレは少し疲れてきている。

「ちよつと、サブリにリユード。いい加減意地張り合っていないで掃除ちゃんとやりなよ！」

ナイスタイミングだ、ルシア。そこで出てきて助かった。オレが掃除さぼつてたというのも、もっともなことだ。

「デイルだつてちゃんとやってるよ」

オレとニーリさんは、はつとなつてデイルを探す。彼は、カーレイさんと書類の整理をしていた。

「カーレイ、これは確か、此処だよな？」

「そうだな。それは、ちゃんと覚えていたんだな。だったら、何故散らかつてたんだ？」

「それは、皆が出しっぱにしてたからだろ？」

「……さりげなく自分の責任を軽くしようとするな」

「負けた、わね」

「そうですね」

オレとニールさんは、あれだけやる気のなかったデイルがなんだから言ってもあそこまでちゃんとやっているのを見て、少しだけ悔しくなった。

「私達も、続きをやるわよ」

こうしてオレ達は、また掃除を続ける。しばらく時間が経つと大體散乱している物はある物と知らない物に分けられて、大分片付いたような気がする。

だが、しかし。

「ちょっと僕は要らない物を売りに出してくる。」

カーレイさんはがらくたやら古本やらを大きな袋に詰めて、まさに外出しようとしていた。

彼の行き先は多分、リサイクルギルドだろう。要らないものを持つていけば、そこが買ってくれるという場所だ。その売った様々な中古品は店が売る、というシステムだ。

「あつ、ずるい！ 私がその役目を引き受けようと思っていたのにいい！」

「カーレイ、裏切ったな！」

ニールさんやデイルからブーイングが起こる。

「大體、君たちに任せるとまた此処にがらくたが増えるんだ」

「今回は買わないぞ」

「私もよっ」

「いや、駄目だ。仕事を続ける」

一歩も引く気がないカーレイさん。

「ルシア。何でも皆頑固なんだ？」

オレは疑問に思ったので、一番頑固じゃなさそうなルシアに聞いてみる。

「リユードも結構な頑固だと思うけどなあ。でも、1つだけ言えるのは『積もった山』のみんなはあたしよりもずっと、意志が強くて目標に向かって頑張ってるってこと。それが普段の言動にも現れちゃっているんじゃないかな？」

「そうか？」

「サブリはあんまり、人に自分が努力しているのを見せたがらないようだけど」

ルシアの発言に、オレは積もった山がただ単に頑固で脳天気なギルドじゃないということが想像できてしまい、返す言葉もなかったのだ。

「てな訳で、ちょっと出かけてくる。僕がいなかったらさぼるんじゃないぞ」

それからのこと、カーレイさんは有無を言わず勝手に大きな袋を担いで出て行ってしまった。

「ちよつと待てえええー！」

パタン、と扉が閉まってからはディルの叫びだけが虚しく響いたのである。

第八話 積もった山の大掃除(2)

「あーあ。あんなに叫んじゃってバカバカしいわね、デイルは」

カーレイさんの外出に叫んだデイルに、ニーリさんの言葉の棘が突き刺さる。彼女はデイルには特に容赦がないような気がしてきた。

「馬鹿にするなよ」

「バカバカしいに馬鹿と返すとは何とも単純ね。……それに私だつて、叫んでたわよ。ただし、心の中で」

やれやれと言ったような表情で、ニーリさんはつぶやいた。

この泥沼化した不毛なくならない争いを、どうやって収めようか？　そうオレは考えてみる。頭の引き出しの中をあれこれ探り回って、ええいこれにしようとおレはある引き出しの中から考えを引っ張り出した。

「デイルにニーリさん、カーレイさんが帰ってきた時に輝くくらいギルドをきれいにして彼を驚かせてみるのはどうか？」

引っ張り出した考えは、こんなもの。カーレイさんだつて働いているのだし、オレ達も何かしなくちゃだろう。

「おっ、リユード。あんたにしてはなかなかいいこと言っねえ」

ルシアがオレよりもさらに低い背を少しだけ伸ばして、ポンとオレの肩を叩いた。

「それはいい考えね。私だつて、あいつを見返してやりたいしね。さあ、デイルも手伝うのよ」

幸いなことに、ニーリさんはオレに賛同してくれた。

「マジかよ……」

デイルはやはりどこか面倒そうだった、けれども。

「でもまあ、仕方ないか。俺もあいつの驚いた顔、久しぶりに見たくなったしな」

とりあえずはオレの提案に乗ってくれるようであった。

それから、オレ達はまだ混沌とした雰囲気が残っている部屋を見る。ちよつと前まではどこに手をつけてもきれいにする余地があったと考えると、まだマシになった方だ。

「ちよつとみんな、見てみなよ！」

ルシアが指差した方向にふと脇目を見ると、ソアラがオレ達の事は気にせずに掃除に没頭している姿が見えた。彼女には、申し訳ないことをしたようになる。ああ、これが壁というものなのか。

「ソアラ、あんたたちが何か言っている間にもちゃんと掃除してたんだよ」

「わたしはただ、何か口出するよりは掃除してた方がいいかな、って思っただけですよ。ケンカも終わっただんなら、掃除の続きです」

掃き掃除を小休止しながらも、箒を持ったままでソアラは微笑んだ。

ソアラ本人にとっては多分、無自覚だろう。けれど、彼女はまたオレ達に逆らえないオーラを出して掃除を促している。昔もソアラに逆らえなかったなあ、とわずかに心を痛くして、オレは熱演するソアラの言葉を真に受けていた。そのかつてはこんなに真面目ではなかったが、でもどこまでもまっすぐなのは変わりないと思いがら。

「大体掃くべき所は掃きましたから、雑巾がけでもしましょ！」

「ああ、出たよ雑巾……」

へなへなと座り込むルシア。何だかんだ言っても、雑巾がけは体力を使う掃除の一、二位を争うものだろう。誰だって嫌なものだ。

「まずは、棚とかテーブルにしましょよ」

「それなら、まだいつか」

「にしてもソアラ、お前は雑巾がけ嫌に思わないのかよ？」

張り切るソアラがルシアを納得させると、今度はデイルから質問

される。

「わたしも嫌ですけど、やらなきゃいけないことは早くやっておい
た方がいいと思いますよ、デイルさん」

「デイルはさ、何でもかんでも後回しにし過ぎなんだよ」

「その補足はいらねえよ、ルシア」

「えへっ、ごめんね」

「じゃあオレ、水くみに行ってくる」

オレは何か出来ることがあればしようと思い、バケツを探して、
ギルド事務所のすぐそばにある井戸へ向かった。

ここの井戸水は生活用水として使うぶんには使える程のきれいさ
だ。だけど飲み水としては使えないだろう。掃除をするぶんにはま
るで問題ないか、なんてくだらないことを考えて、オレは井戸の奥
から水を引つ張り出した。

鉄バケツに入った水は容量の半分程でもずっしりと重く感じられ、
オレを早く元の持ち場へ戻そうと催促しているようだった。

「とりあえず水は汲んでおいた。雑巾かけるなら、さっさと始めよ
うか」

「リユードにしては気がきくじゃないか」

オレはバケツを下ろすと、雑巾を5枚バケツにかけておいた。こ
れで、ここにいる全員分ある。

「ソアラに水の魔法使ってもらって手もあつたんじゃないかなあ
？」

その時ルシアの発言に、皆が注目した。オレの仕事は何だったん
だ。

「その手もあつたね、ルシア」

その本人はというと、初めて教わった知識に感心するように目を
丸くしている。

「魔法は使っている人の精神力を使うものよね、リユード。だから
その判断は的確だと思うわ」

「そうですね、ニーリさん」

「リユードさあ」

「何だ？」

「なんかソアラにばっか優しいよね。変なの。きっとリユードは健気なソアラちゃんが可愛くて仕方がないんだよね！ うんそうだよー！」

「ばっ……。な、何を言うんだルシアはー！」

「もしかして凶星かなあー」

どう考えてもオレで遊んでるようにしか見えないルシアと、それにうろたえることしか出来ないオレ。その成り行きを期待した目で見つめるニーリさんの視線が怖い。デイルはというと、まるで無関心にそっぽを向けてつまらなさそうにしていた。

どうして女の子というものはこの手の話が好きなんだか、とだけしか考えられず、ルシアのからかいの裏にある感情をオレは察することが出来なかった。

「……少し、照れちゃうからやめてよ、ルシア」

ほんのりと顔を赤くしながらも困惑したソアラ。全く、彼女にとってもいい迷惑だ。

「ソアラはどうなのかしら？」

成り行きを見つめるニーリさんの、一言。

「わ、わたしとリユード君はその、何でもないんです。リユード君は単に、親切なだけなんです。錯覚ですよ、錯覚」

安心感と心の傷つき具合、1対1。ただの親切心だということは否定できないが、そこまではつきりと言うこともないように思えてくる。何というか、プライドが傷つくような。

「あっ、リユード傷ついちゃったよ。あたしたち言い過ぎたかなあ、サブリ」

「言い過ぎにもほどがあるつつの」

ふてくされて返事をするオレ。

「それぐらいで傷つくなんて、心が青ーい証拠ね」

どうやら半分の傷つき具合はオーラの変化によってルシアが察してしまっただけらしい。ニーリさんはそれが普通のような言いぶりであったが。

「さあ、それよりも掃除しなくちゃあ！」

ソアラはというと、ふくれてルシアやニーリさんの手に雑巾を持たせている。

「俺、巻き添えかよ」

ソアラは機嫌が悪いのか、デイルにも雑巾を渡していた。

こんな表情を見たのは久しぶりだなあと、ルシアやニーリさんのからかいがなかったら素直に思えていただろう。

テーブルや棚の類を拭いていくと、みるみるうちにそれらは秩序を取り戻していく。

テーブルの上にあった空の花瓶が忘れられたようにホコリをかぶっているのに、オレは気がつく。花が挿してあっても、とくに枯れているだろう。

「この花瓶も、ホコリを払ってあげるべきだよな」

「あ、ああ。そうだよな」

ルシアは造花も大切にするように、丁寧にホコリを払い始めた。

「この花瓶にさ、花を摘んで玄関に飾っておきたいなあ」

「それ、いいかもな」

花瓶をきれいにするルシアの目は未来に植えるはずの花をも大切にしているようで、オレはルシアの意外な一面を見たような気がした。

机や棚といった所を拭き終わると、大仕事である床の水拭きだ。初めは誰もが嫌がっていた、けれども。

「位置について。よい、スタートっ！」

ルシアの合図で、オレ達は走り出す。

デイルが本気を見せつけてトップを独走し、オレとニーリさんがその次の座を狙ってせめぎ合う。その後から、ソアラは必死でオレ達を追いかけていた。

ラストスパートを乗り切り、ゴールに向かって壁へと手を伸ばすっ！

それは僅かな差だった。ルシアは目を凝らして微妙な時間を見逃していなかった。

少し遅れて、ソアラが到着する。

「ゴォールッ！ 一番にデイル選手、続いてリユード選手、ニーリ選手、ソアラ選手っ！！」

様子を見る限り、真面目に掃除をしてないって？ 水拭きを始めたら、知らぬ間に雑巾レースが勃発したからオレも参加したただけだ。これが、なかなかハマるものだしな。

「勝負にもならねえな」

さらりと流すように、でもさりげなく自慢げなデイル。

「じゃあデイルが今度審判だよ！」

そんなデイルにルシアは審判の役目を押し付けようとする。

「それならリユード、トップ争いが出来るわね。デイルがちゃんと見てくれるかどうかは解らないけど」

「ニーリさんには負けませんよ」

「デイルさん、わたしも審判手伝いしましょうか？」

オレとニーリさんが同じ目線の高さでばちと目で火花を飛ばしている最中、ソアラはデイルと審判を手伝おうとしていた。

「大丈夫だ」

「どうせわたしも、皆さんと勝負になりませんし……」

「じゃ、念のために成り行きを見ていてくれ」

「はい！ ありがとうございます」

「続いてのレースの参加者はっ！ リユード選手、ニーリ選手、ルシア選手だ！！」

「これは激戦になりそうです！　いったい、誰が勝利を手にするのでしょうか？」

デイルもソアラもハイテンションで実況している。あいつら、普段はこのギルドのメンバーにしてはテンションは高くなかったはずだ。何事も、実際にやってみるまで分からないってことか。定位置に雑巾を置き、これからの戦いに備える。

「いよいよ決戦が始まるっ！」

「それでは位置について。よいい、スタートです！」

ソアラの合図に、オレ達は雑巾を手にし身構えた。彼女が手を上げてスタートを伝えると、三人は一斉に走り出す。

走り出しはニーリさんがトップを突っ走っていた。その次にオレ、ルシアと続く。

ルシアはともかく、ニーリさんには何としても追いつきたかったオレは、前を見ず床を蹴ってスピードを上げることだけに集中していた。

どんどんと加速度がかかり、それに比例して速く床を突き抜けていく。

知らない間にニーリさんを追い越していたようだが、周りのことなんて気にしていられなかった。

自分でさえコントロール不可能な速さに達し、進行方向へと引力が働いているように思えた。

その時。

建物が小刻みに揺れる。

無機質な音を伴に響かせて。

オレはその事に記憶はない。その時に意識が、走った床よりもさらに遠くへと行ってしまったような気がするからだ――。

「リユード君！　大丈夫！？」

「頭を打ったようだな。……走った勢いで壁に激突、か。全く、馬鹿なものだ」

……この声はソアラとデイルのようらしい。それらを聞いてから

のこと、声はもうオレに聞こえていなかった。

「リユード、気がついたか」

「わっ……。びっくりしました」

オレは目を覚ますと、目の前にはカーレイさんがいた。よく見てみると、場所もロビーだし、テーブルにはケーキや紅茶を飲んだような後もある。その中で、ソアラだけはケーキを味わって食べていた。

「掃除を働かけたのは、君だそうだな。それは誉めておくが、唯一の白魔術使いがあまり羽目を外さないでくれ。ニーリも困っていた」

「そうですか……。すみません」

カーレイさんに言われると、本当に申し訳ないように思えてきた。「そうだ、お土産にと思ってケーキを買っておいた。その魔術冷却器に入れてあるから、持って行って食べるとよい」

「本当ですか!？」

あのケーキはカーレイさんのお土産だったらしい。

オレはカーレイさんに感謝しながら浮き足で魔術冷却器の方へと向かう。

「ケーキがない……」

どういうことだ。冷却器の中にはお皿とフォークしかない。

「あれ、リユードのやつだったの？　いつまで経っても起きないから、あたし食べちゃったよ」

ルシアの心ない言葉に、怒りがふつふつと湧いてきた。

こいつには散々たる扱いを受けられているものの、これというこれは、許せない。

「オレの苦勞とケーキを返せ！　そして後でもっと高いケーキ奢れよ、ルシアー……!」

第九話 ギルド流演出作戦（1）

「もうっ、これじゃ『積もった山』じゃなくて『積もってもいないさら地』だよ！」

ルシアは誰を責めるのでもなくただ、必死に今の状況に対して不満を叫んでいた。

……その意見には同意。

オレ達は相変わらず「積もった山」の事務所には集まっているものの、相変わらず退屈していた。

「『積もってもいないさら地』……なかなか斬新なネーミングだな。そもそも『積もった山』なんて名称、誰が考えたんだ？」

ちよっとオレは、ルシアに問いかけてみる。

「サブリだよっ」

「ああ。ニーリさんだったか。……ニーリさんはどうしてそんな名前を付けたのだろう？」

確か『積もった山』に入る前にニーリさんがそんなことを言っていたようなと、オレは思い出す。

「聞きたい？ リユード」

噂をすればニーリさんがひょっこり顔を現した。

「聞きたいです」

「ルシアの話聞いてれば、なんとなくわかると思うのよね。ソアラは勘づいた？」

「はい。『積もった山』って不思議な名前だなあと思いましたけど、やっという意味がはっきり見えてきました」

今一瞬ソアラは絶対にわかるだろうと確信した。なんか悔しい、ニーリさんに勝負してやる。

「ルシアが言ったこと……、『積もってもいないさら地』？」

「そこまではわかったようね。それをヒントとして考えるのよ」

何かを企んでいるような、小悪魔的な表情で問いかけるニーリさ

ん。

「『積もった山』と『積もってもいないさら地』か……。共通点はどこにあるのだろう?」

「3、2、1」

オレが悩んでいると、ニーリさんは勝手に時間を計り始めた。しかも考える余裕が露ほどもない。

「はいっ、終わりー」

「考える暇もなかったですよ。大体なんですかその短すぎる制限時間」

「リユードが焦って答えられなくなるかなあって思ってた」

「……嫌がらせとしか思えません」

ニーリさんはオレをいじめて楽しそうだ。こういうの、Sって言うような気がする。けれど、オレはMじゃない。断じて違う。

「じゃ、ソアラ。答えをどうぞ」

「ちょっと待て」

「あっ、敬語抜けちゃったわね。まっ、私に敬語使わなくてもいいけどさ」

オレはしまったと思いつつも、ニーリさんはあっさり許してくれた。そう言えば、敬語使っているのはオレとソアラくらいか。ニーリさんがそう言ってくれるんだったら、使わないことにしてみよう。

「じゃ、そういうことにしておく」

「結局敬語は使わないのね。いいわよ、それでも。待っててあげなくていいから、ソアラ、言っちゃって」

「仕事がありすぎて積もるくらいな有名なギルドになるように、『積もった山』とつけたんですよね?」

ソアラは情け無用であっさり裏切った。これでも、昔よりはオレに対する扱いは良くなったと思ったのだが。

「そう、正解ね! ……でも、疑問形や念押しみたいにする必要はないと思っただわ。もっと自信を持って頂戴」

「あっ、はい!」

……オレは、昔のソアラが自信に満ちていたことを知っている。
だから、ニーリさんの発言には、少しだけ過去との歯車のずれを感じたのであった。

「カーレイ。俺、いつも思うんだけど『積もった山』ってセンスない名前だよな」

「同感だ」

オレの脇で、話に入りこめないディルとカーレイさんがいじけていた。

ここでは、関わらないでおいた方が無難だろう。後でニーリさんの制裁を加えられたのは、言うまでもないことだから。

「何だよ、全く」

ディルとカーレイさんがさらにふてくされているその時、玄関のベルがオレ達を呼ぶ音がした。

「やった、仕事が積もったよ！」

嬉しそうにルシアは飛び出していく。

「暗ーい顔してないでさ、リーダーもおいでよ！」

ルシアはカーレイさんを心配したのかしてないのか、明るく呼びかける。

「ルシア。僕のことは放っておいてくれ」

「リーダーの好きな仕事かもしれないんだよ？」

「……そうだな。いつまでも退屈していると、気分がおかしくなりそうだ」

結果的にルシアはカーレイさんを励ましていたようだった。

カーレイさんは立ち上がり、ずれているのかも分からない眼鏡を直す。多分、それは形式だか癖なんだかなんだろう。

外の人があつたのだろうかと思つたのか、ベルをもう一度鳴らした。

「はーい、いま行くよ！」

ルシアとカーレイさんは玄関へと向かった。

「私も行くわ」

ニールさんも彼らの後をつける。

オレは、奥のほうでこっそり成り行きを観察することにしよう。

「皆さんはじめまして、こんにちは。このギルドはボランティア活動でも何でもすると伺っているのですが」

久しぶりのお客さんは、帽子を脱いで手に持ち、礼をする。黒いスーツが似合う、紳士という言葉が似合う青年だった。

にしても、見るからにお金持ちそうなのに、どうしてわざわざ裏通りのここまで来るんだろう？ ということがオレにはそれが疑問だった。多分、皆もそう思っていることだろう。

「その通り。ここはボランティアギルドです」

カーレイさんが受け答えた。

「それなら、ここまで来た甲斐がある。つまらない仕事ではあると思いますが、ここは貴方達を見込んで頼みがございます」

「あなたがつまらないと申しても、僕達にとっては有り難いことだ。何なりと引き受けよう」

カーレイさんはどんな仕事であれ受ける気満々のようだ。

ルシアだかニールさんだかが彼を仕事バカと評していたが、それはその通りであった。いや、面と向かって言うのはマズいけれども「それなら話が早い。皆さんには、サクラとして、我々を盛り上げてほしいのです」

「サクラ？」

「サクラって、花のこと？ 一度、東の国で本場のものを見てみたいなあ」

冷静なカーレイさんとは対照的に天然なんだが、紳士の依頼に本気でボケるルシア。

「違うわ。それは桜よ。サクラはサクラでも、こっちのサクラは一般人に混ざった引き立て役のことよ」

それにニリーさんが解説を加える。

「し、知らなかった……」

「ははは。風流のあるお嬢さんですね」

「ありがとうございますっ！ あたし、誉められちゃった！」

ルシアはいつものように、すぐいい気になる。頬に渦巻きを書いたら、きつと似合いそうだ。怒られるから、やめておくけど。

「貴女なら、きつと盛り上げるのもお上手でしょう。……あつ、詳細を言いそびれてましたね」

「詳細がなければ、僕達はどうしようもない。……その詳細を、話してもらえますか？」

「かしこまりました。私は、新人アイドルのマネージャーをしている、ルーファンと申します。2週間後の中央広場でのライブにて、彼女を盛り上げてほしいのです」

ルーファンさんはそう言つて、カーレイさんに名刺を渡した。

「あ、アイドル！？ これって凄くないかな？」

驚くルシア。やっぱり女子というのは、ミハーだ。オレは芸能関係というものにはあまり興味がないから、彼女の気持ちには理解できない。

「まあ、新人ですけどね。……いや、新人であるからこそ、あなた達の助けが必要となるんです」

「そうね。売れっ子だったらファンがいっぱいいて、勝手にきゃーきゃー言ってくれるしね」

ニリーさんはよく考えれば極めて一般的な一般論を述べた。

「そうなんです。彼女はコネというものをこの私以外に持っていないんです。全くの無名、なんですよ」

「無名の状態から彼女の知名度を上げていきたい。つまりはそういうことですね。それで、僕達がその一環を担うと」

カーレイさんは分かり易く話をまとめた。要するに、要約。

……オレとしては、何故そのアイドル（？）がルーファンさんとコネを持っているかの方が不思議なのだけでも。

「……ニーリにルシア。それに隠れているリユード」

盗み聞きしたこと、カーレイさんにはあっさりバレている。

とりあえず様子見とだけに思ったのだが、我ながら悪いことしたと思う。反省しよう。

「君たちは、どう思うか？　僕としては、引き受けたいと思うのだが」

「いいんじゃないかな」

「かまわないわ」

ルシアとニーリさんが賛成するなか、バレたうえでずっと隠れているのもどうかと思ったので、オレは顔を出す。

「あの、ずっと隠れててすいませんでした……。オレも、出来ることなら手伝います」

「ありがとうございます。でも盗み聞きは感心しませんね。こそこそしているよりは、表に出たほうが好感度というものも上がるものですよ」

可愛い女の子だったらまだしも、好感度うんぬんはどうでもよかった。それに、オレは様子見をしていただけ。人に嫌われることを心地良く感じるなんてこれっぽっちも思わないけど、かといって皆に好かれようとも思っちゃいない。むしろ、そんなことは無理だ。

……でも、白魔術師志望者として、それはまずいかな。『白魔術師たるもの、分け隔てなく博愛の精神を持って』なんて、偉い白魔術師の方の名言にあったはずだ。

「それは気をつけます！　オレ、仕事頑張りますからー！」

そんな訳で、しどろもどろになりながらオレは誓いを口にしたのだった。

「まあまあ、そんなに焦らなくてもいいですよ。私はじっくりと貴方が頑張るのを見るだけですから」

「は、はい！」

ルーファンさん、彼にはペースを崩されそうだなあと、オレは少しだけ苦手意識を感じたのだった。

第十話 ギルド流演出作戦（2）

「やばい、寝坊した！！ 母さん、起こしてって言ったのに！」

オレは急いで上着に袖を通して母さんに訴えた。

「起こしたわよ。それも、何度もね。起きないあなたが悪いのよ」
毎朝、朝に弱い自分を恨みたくなる。今日のように、寝坊すること
も滅多にないことではなかった。

また、『積もった山』の皆に怒られるか笑われる。今日は、ついでない日になりそうだった。

しかも、今日は依頼人と会うことになっているから、遅刻なんて
ご法度だ。

とりあえずいつものように言われる寝癖だけは直さないと思い、
左手に食べかけのパンをつかみながら家の鏡の前に立って、右手だ
けで髪を整えた。その合間に、左手のパンをかじったりして我なが
ら、器用なものだ。

「お行儀悪いわよ」

母さんにそう咎められるが、気にしていられるか。これは、時間
との戦いなんだ。

刻一刻と時を刻み続ける秒針も気になるものだ。

パンの最後の一口を口に入れ、寝癖がとりあえず整ったのを確認
したら、荷物を持って玄関に向かう。そこに立てかけてあるレイピ
ア（使うことはないだろうが、持っておくと安心というか持って行
くのが日課となっている）を取って、「行ってきます！」とだけ言
を残して『積もった山』の事務所へと駆け出していった。

母さんが何か言ったような気もするが、走ることに集中している
せいか何を言っているかはまるでわからなかった。

人通りが多くなり始めた大通りを駆け抜けて、『積もった山』事
務所がある路地へと向かう。地図でもないと思いそうになるが、さ

すがに毎日通うようになったらそんなこともなくなった。ばつちり、曲がり角にどんな建物があるのかも思い出せる。

『積もった山』事務所に到着するまでのこの道中は、何かが足りてないように見えた。そう、オレがまるで気づいてなかっただけでいつものように『積もった山』事務所の玄関のベルがカランカランと音を立てて、オレを『積もった山』に招き入れた。

「遅かったな、リユード」

すぐに姿を見せたのは、カーレイさんだった。また何か小言を言われるのではないのだろうか、とオレの中で嫌な予感がめぐりめぐる。

「おはようございます」

平静を保とうとして、まずは挨拶。いつも通りにやり過ごせばいいか……、と思ったけれども、流石に一筋縄ではいかなかった。

「今日、何かあるか分かってるか？　いつもの集まりとは違うのだぞ。デイルだってもう居るからな」

……はい、カーレイさんが言わなくても誰かがこう言うだろうと予測していました。全力で寝坊したことを反省します。

それに、毎朝オレと事務所に着く時刻のビリ争いをしていたデイルがもう来ているっていうのも悔しかった。

「それぐらい、分かってます。けれど……」

言い訳しようとも考えてみたが、言葉に詰まってしまふ。

「けれど？」

「寝坊してしまいました」

正直に白状してしまった。

カーレイさんは漫画でよくあるようにスベツて見せた。

どうしよう、言葉が続かない。コメントのつけようがない。空気も気まずいものになりそうだ。だが、いつの間にか元の体制に戻ったカーレイさんはすぐに口を開いてくれた。

「正直で、よろしい」

オレはあっけにとられた。石のように真面目なカーレイさんが白

状でも認めてくれたのは予想外だったが、ここはカーレイさんの寛大さに素直に感謝することにしよう。

「しかし、まだ依頼主は来てないようで良かったな。今後、依頼主が来たにもかかわらず遅刻したらお前の家まで行つて魔術でも何でも使つて手段を選ばずに起こしに行くからな、覚悟しておけよ、リユード」

寛大といえども釘は刺される。心にガツンと、金鎚で叩かれるように。

「分かりました……」

今度、威力絶大で絶対に起きられる目覚まし時計でも探してみよう。本当に“気”が込められていて時間になると軽く魔術が発動するものがないかな。

依頼主が姿を表したのは、そう遅くはなかった。

昨日顔を見せたルーファンさんと、もう一人はオレより一、二歳年下と思われるショートカットが似合う女の子。その女の子がどうやら、アイドルのタマゴらしい。その子を盛り上げるために、オレ達が依頼を受けた、と言うわけだ。

「皆さんおはようございます。こちらが、ミレッタです」

「は、はじめまして！ 今回はミレッタのために盛り上げ役を引き受けてくださつて、本当にありがとうございます！ ミレッタ、頑張つて歌いますから、ふつつか者ですが、どうか、よろしくお願いしますねー！！」

ミレッタというアイドルのタマゴは、とにかく一生懸命で寧ろ必死過ぎるんじゃないかというくらいだった。アイドルとしては、これぐらいやる気がないとやっていけそうもないけれど。

と、その時、ミレッタさんはオレのことをまじまじと見つめてきた。なんかアイドル（タマゴだけでも）に見つめられたら、どきりしない訳はない。身にまとったオーラも、弱いながらもちゃんと放たれている。

「さっきこの辺りの路地で必死に走っていたのは、あなたですよ？　このギルドの人だったんですね！」

「そうだけど……」

何だ、そういうことか。でも、全くの赤の他人であるオレをよく見ていたなあと思う。けれど、路地は人通りも少ないし、目についても無理はないか。だが、少しは恥ずかしい。

「よく見てましたね、ミレッタ」

「格好悪いぞ、リユード」

ルーファンさんはミレッタを誉めていたが、デイルはオレをバカにした。この対照的な待遇の差、ちよつと泣けてくるぞ。

「デイル、お前にだけは言われたくないな」

「俺は必死なように走らないからな」

「君の足が早すぎるだけだ！　明日は手加減しろよ！！」

オレと毎朝競走してるくせに。けれども、その競走に本気で挑んでも勝てたことはないということを思い出したら、途端にむなしくなってきた。墓穴、掘っちゃったなあ……。デイルにいいところ見せてしまったよなあ……。さらに奴は背が高いし、美形だし、不公平だな。

「毎朝競走してるなんて、おふたりは仲がいいんですね！　そういうのって、ステキです、青春です！！　憧れちゃいます！　ルーファン、ミレッタ、このギルド気に入りましたよ！」

ミレッタは目を輝かせる。そんなことルーファンさんにいう必要があるのかよと思ったけれども。

「別つちに。な、デイル」

「ああ」

端から見れば恐ろしく息が合ってるように見えたらしく、

「やっぱり仲、いいですね」

とソアラまでからかった。

「おいソアラ、やめとけよ」

「リユード君もデイルさんも素直じゃないですよ」

オレ、割と素直な方だと思ってたのにな。

「茶番はそこまでにして、打ち合わせに入ってもらおうか」

そこにカーレイさんが割り込んで、ようやく本題に入ろうとした。「そうですね。ミレッタ、何か彼らにしてもらいたいことはありますか？」

「うーんと、客席でわーとかきゃーとか言ってもらうとか？」

……こんな少人数で言っても、むなしくなるだけだと思う。

『積もった山』の皆もそう考えたようで、場には沈黙が流れた。

「やっぱり、それじゃ、ありきたりですね！」

何で場が白けたのか分かってないようだけれども、まあ、いいや。

「だったら、あたしをステージに招待してみてよ！」

今度は、ルシアが突拍子のないことを言い出す。

「無理だろ。オレたち、縁の下だぞ」

「ちつつちつ」

呆れたオレに、自信を持った表情で小さな胸を張り、指を振っていたルシアがいた。

「例えばさ、ミレッタちゃんが歌つてるとするじゃん？ 歌の盛り上がるところでミレッタちゃんはおたしをゲストとしてステージに立たせるの。そしてあたしも一緒に歌う。いいアイデアじゃない？ 華やかできらびやかでしょ？」

「ルシア、あなた自分の歌唱力分かってるの？」

「うん、ステージで歌つても全然恥ずかしくないよ！」

「こつちが恥ずかしいから、やめておけ」

ニーリさんとカーレイさんの忠告に、「へ？」と首を傾げるルシア。どうやらルシアは、オンチのようだ。それに全く気づいていないところが、タチが悪そうだが。

「そのアイデアはいいと思いますよ。他に、私としてはボランティアギルドならではの発想を期待します」

ルーフアンさんは感心した様子だった。

でも、ボランティアギルドならでは？

そこにオレ個人としては少し気になる所があったので、聞いてみることにしてみた。

「そういうものって演出ギルドとかには、頼まなかったんですか？」
「どうやら、皆さん多忙だったようです」

疑問はあっさり解決した。

演出ギルドのほう金がかる、とかだったのかと思いきや、スケジュールが詰まっていただけだったようだ。だからボランティアギルドか。

「では、宿題として盛り上げ、演出、何でも考えてきてください。アイデア次第では、報酬も変わりますからね」

報酬、との言葉に目がくらんでいないメンバーはいなかった。ユルイノリだったのとは一転して、途端にみんな真剣に考えようとし始めた。

報酬が増えたら嬉しいけど、アイデア、と言ってもなあ……。さっぱり、思いつかないや。

オレに発想力を求めるほうが間違いかもしくなってきた。

第十一話 ギルド流演出作戦(3)

「では私達は、これで」

オレ達に演出という大きな課題を残して、歌や踊りの練習があるからとルーファンさんとミレッタさんはさっさと帰っていった。

ミレッタさんはまったくの無名だから、かけられる予算はとても少ない。

さらにオレ達のギルド、積もった山はボランティアと銘打って何でも引き受けてしまうけれど、零細ギルドであることには変わりはない。

だから、細々とした者同士いい組み合わせではあると思うのだが……。

「やつぱりお金ないと、どうしても安っぽくなるわよね?」

「そうなんだ。そこが問題だ」

と、ニリーさんとカーレイさん。

ギルドの規模が小さいものだから、お金もない。

少ない予算で、いかに上手い演出をするか。それが、一番の課題だった。

「あたし達の演出がしょぼかったら、ミレッタちゃんとルーファンさんに申し訳ないよ!」

「……だったら誰か、考えろよ」

「わたしも考えてますけど……」

と、ルシアにディルにソアラ。

見てのとおり、肝心の演出の話し合いについては泥沼化していた。皆が、少しずつ無口になっていくようだった。

「つと、リユード。お前も、何か案ないのか?」

「何でオレに振るんだよ」

オレはしばらく黙って成り行きを見ていこうとしたものの、デイルはそれを許さなかった。

「こここの所喋ってないし、突っ込みもないからな」

「そうそう。突っ込みあつてのリユードだしね！」

突っ込みキャラが見事に定着。

いつものことだけどデイルもルシアもさりげなく酷い所指摘してくるぜ。

「オレも考えているし、突っ込む気力も起きない」

「あっそ」

オレとデイルは顔を向き合わせて、互いにそつぽを向けてみせた。雰囲気、一段と悪くなってきたいるなあ……。

そんなことはわかつているけれども、オレは何もできないままにいた。

「つと。そういうばねえデイル、あんたもアイドルやってみたらどうかしら？ そのテンションの低さ、何とかできるかもしれないじゃない」

ニーリさん、この空気の中でもない提案持ちかけてきた。

とりあえずオレは、デイルのアイドル姿ってどんなものだろうと想像してみたけれども、いつもの無気力なイメージが重なってしまったため、オレは思わず笑ってしまう。

にしても何だか、全く関係ない方向にそれていくような……。

「顔だけはいいし、いいんじゃないかな」

ルシアもニーリさんに続く。

「デイルさん、きっと人気出ますよ！」

ソアラまで便乗していた。

どうして『積もった山』の女の子達はこうもパワフルなのか。

「……断る。誰がわざわざ一目に出て歌ったり喋ったりなんてするか。ルシア、『だけ』とは何だ。リユードも何笑ってんだよ」

やっぱりというか、女子三人の提案を蹴って、あくまでデイルはマイペースを貫いていた。

さりげなくルシアとオレの些細な言動に気づいているのはどこか
気に入らない。

「本当だもん。デイル、根暗だし冒険以外やる気ないし」

確かに正論だけれども、そんなにドストレートに言われちゃ、デ
イルに同情する。オレもルシアにはさつき散々に言われているしな。
「冒険がやる気だったらいいだろ。な、カーレイ」

「普段の生活態度も良くして欲しいものだな」

カーレイさんもぴしゃりと言い放った。

「カーレイもきついな……」

「と、ニーリ。これ以上話を脱線させるなよ。演出の続きだ。僕達
の中でアイディア出さなきゃいけないのだが、誰か、意見のある者
はいるか？」

カーレイさんの一喝とともに、オレ達は本題へと戻る。だがしか
し、誰も手を上げず、沈黙が戻っただけだった。

全く、進歩してないように見えていたのだった……。――

「なしか。……だったら僕が、さっき思いついた案を出す」

そのカーレイさんの一言とともに、場は一気に明るくなった。

「待ってましたっ！」

「さすがはカーレイさんですね！」

ルシアもソアラも早く聞きたそうにうずうずしている。

「……そんなに大したことでもないが、光と火の魔術で花火を作っ
たり、風の魔術で、紙吹雪が何かを散らせるってのはどうだ？ こ
れなら予算も抑えられる。必要なのは僕の気力と紙だけなのだが……

……、ソアラも魔術の方を手伝ってくれ」

「は、はいっ！ 頑張ります！」

「（オレ、俺、あたし、私）達無関係っ！？」

ソアラが仕事を与えられて嬉しそうにしているのとは対称に、黒魔
術は専門外なオレ達は、見事なまでに声が揃っていた。

「君達前衛系は体力もあるだろうからな、後ろでアクロバットでも
やってみたらどうだ？」

「そんなこと出来ませんよ！ オレ、白魔術使いですよ！？」

「その腰の剣は何だね？」

「護身用です！」

……オレは、カーレイさんがここまで悪ノリする人だとは思って
もいなかった。このギルドの雰囲気、そうさせるのだろうか。

でも、ちよつと意外。彼の真面目で堅すぎる印象は少し和らいで、
近寄りがたい雰囲気もがた崩れ。

「……さっきのはちよつとした冗談だ。けれども、かつて優れた戦
士が巨大な魔物と戦うのを見た時は、アクロバットに思えたな」

「そうだよな。……俺もそんな戦士になりたいものだ」

「だったらここで頑張るのよ、デイル。私も協力するわ」

優れた戦士になった自分の図を想像でもしてみたのか、デイルは
珍しく真剣な目つきだった。

そんなデイルに、ニリーさんも背中を押そうとしていたのだが……。

「それとこれとは別だけだな」

それでもマイペースでどうする。お前の見せ場になるかもしれないの
に。

「私はそう思わないわ、デイル。戦場のコロシアムもアイドルのス
テージも似たものだと思うの」

「そうか？」

「どっちも、見る人を引きつけるじゃない！」

「確かに、五月蠅いよな」

「あれは熱気よ！」

「わたしも、そうだった場には慣れてないですね」

「わかるのか、ソアラ？」

確かソアラが引越したのは、田舎村だった筈だ。ずっと、喧噪
とは遠い生活を送ってきたせいだろう。

「のんびりと草木に囲まれた自然の中にいるのが幸せなんです」

「それも違う気がするな……」

「で、デイル。やる気はついた？」

「あまり気乗りはしないが、やってみる価値はあるかもしれないな」

「でもその場合、踊りを誰かに見てもらう必要があるんじゃないかな？」

「そ、そうだな！」

そのことについては皆すっかり盲点だったようだ。周りを見ると、皆が驚いたように眼を見開いていた。

「そういえば、そうよね。それに、リユードとルシアも踊るのでしよう？」

「他に出来ることがないのなら、踊ってみるよ」

「さっすがリユード！ あたしたちもアクロバットできないなりに頑張ろうね！もしかして、アクロバットできない同盟、とか？」

「何その同盟」

変な同盟に勝手に入れられた。

「それじゃ、決まりね」

「踊りについては、ミレッタさんの踊りの先生に頼んでも大丈夫なのでしょうか……」

「明日ルーファンさんにでも聞いてみるしかないかもな。とりあえず今日は、戦士も術士もいつもに増して鍛錬しておけよ」

それだけカーレイさんは言って、会議はお開きとなった。きっとカーレイさんがいなかったら、ここまで話し合いは進んではいなかっただろう。

彼は、積もった山の演出家であるのかもしれない。

第十一話 ギルド流演出作戦(3) (後書き)

〈次回予告〉

ダンスの練習をすることになったオレ達。ここは前衛系の体力の見せ所。

だが、先生は優しそうに見えて実は冒険者や戦士にだけ厳しかったり？

カーレイさんとソアラが羨ましい！

くっ、オレも黒魔術を勉強するべきだったかも！？

次回も、積もった山のギルドびとをお楽しみに！

お久しぶりです。お待たせしてすみませんでした！！

上のものは、調子にのって書いてしまったものです。無視しても構いません。

第十二話 ギルド流演出作戦(4)

「おはようございます、ルーファンさん」

次の日。オレ達はルーファンさんに、ミレッタのダンスの先生を紹介してもらおうと試みていた。

ルーファンさんの事務所は積もった山からそう遠くない場所であり、積もった山同様にこじんまりとした雰囲気だった。

そして会議等に使うロビーは狭いようで、全員が入る余裕はなかった。そのために、ニーリさんと、オレの二人が出向くことになったのだ。

カーレイさん曰わく、「僕とソアラは直接関係ないし、ディルは協調性に欠けるし、ルシアは人の話を聞かないから」だとか。要するにただの消去法である。

早く起きたり、身だしなみを(オレの出来る範囲で)きちんと整えたりと今日の朝は大変ではあったけれども、ルーファンさんはオレ達に紅茶を振る舞ったりと、至れり尽くせりでもてなしてくれていた。

「あの、ルーファンさん」

「何でしょうか？」

オレは緊張を和らげるために温かい紅茶をちびちびと飲み込んで、本題の頼みごとをしようとする。

「ミレッタさんのダンスの先生を紹介してもらえないでしょうか？」

「私達、ミレッタちゃんのバックダンサーをしたいのよ。この通り、探し物から魔物討伐まで、何でもするのが『積もった山』ですから足りない言葉に、ニーリさんはきちんとフォローしてくれた。

「彼女も忙しくはなさそうなので、紹介しても構いません。ですが、少々問題がありました……」

ルーファンさんは少しだけ難しい表情をした。

「何？ 困ったことでもあるのかしら？」

「……彼女は、かなり変わった人物なのです」

「やれやれといった風に、ルーファンさんはため息まじりで呟いていた。

「なになに、どんな風に？」

困った顔のルーファンさんが珍しいのか、ニーリさんは興味深そうに食いついている。

「見れば分かりますよ。……全く、ミレッタの体力が並みのもので良かったです」

「……何かやばそうじゃないかな、ニーリさん」

「そんな雰囲気ね。でも、怖いもの見たさで行ってみたい気もするわ」

わくわくとしたニーリさんだったが、オレは乗り気にはなれなかった。

「オレは遠慮しておきます」

「みんなで行けば大丈夫よ」

「そうですね。では、一応地図とミレッタのレッスンの時間は渡しておきます。どうなっても知りませんが、ご健闘をお祈りしますよ」

ルーファンさんの後押しもあって、こうしてオレ、ニーリさん、ルシア、デイルの4人はミレッタのレッスンの時間を見計らってダンスギルド「緋色の靴」へ向かったのだった。

「へえ、ここがダンスギルドかあ。広くていいねえ」

「私達はとりあえず見学に来たのよ」

「じゃ、とっとと早く終わらせようぜ」

建物まで地図を見ながらたどり着くと、そんな感想がちらほら聞こえた。

ガラス張りの重い扉を開けて中に入る。入り口近くの練習場を見ると、案の定ミレッタさんはダンスの練習の最中だった。

「あら、いらっしやい。あなた達も、踊りにきたの？」

ダンスの先生というのは、一見すると普通の優しそうなお姉さんだった。

「ミレッタさんのバックダンサーを勤めることになった者です。まずは見学をしに来ました」

「あら、見学だけえゝ？　あなた達も一緒に踊りなさいな。見たところ旅とかにでてそうで、体力もありそうだしね」

お姉さんは笑顔で踊りを勧めている。しかし、裏に黒いものが見えたような気がして、怖い。

「でも私達、踊りなんて、全く習ってもないわよ」

「その少年？　お姉様が手取り足取り教えてあげますわよ」

ニーリさんが事情を説明しようとしたその時、お姉さんはオレに近づいて、そつと耳もとでささやいた。

オレは思わず肩が上がり、顔がひきつりそうだった。

「なんでオレなんですか！」

でも内心、どつきりしていたり。なんて人だ。

「リユード、顔真つ赤よ」

真つ先にニーリさんにそれを指摘される。

「えーっ、リユードってそんな人だったの？」

さらに、ルシアも悪巧みをするかのような声色で続いた。

「余計なこと言うなよ！　……な、デイル」

何とかしてほしくてデイルの方をちらりと見ると、彼はまるで知らないふりをしていた。

相変わらずの、無関心。裏切り者め。

「……もう無理です」

「なあに、まだイケるわよ」

ダンスの練習は（ほぼ強制的に）始まってしまった。

頼みの船のニーリさんの説得もむなしく、彼女でさえ丸め込まれてしまった。

そしてここ一時間ほど、踊らせ続けている。まるでオレたちは、

ゼンマイ仕掛けの人形みたいになっていた。

「あたしも疲れたあ」

ゼンマイ仕掛けの人形のように、時間とともに動きはどんどん鈍ってゆく。

確かにお姉さんの教え方は上手だったが、まるで容赦はなかった。えげつないという言葉がお似合いだ。

「あつ、皆さん。ミレッタは、これを毎日やってるんですよ。だから、ファイトです！」

当のミレッタさんは今、小休憩をとっているようでオレたちを激励している。しかし、地獄絵にいるような疲れきった人々に頑張れはむなしいだけかもしれないが。

けれどもミレッタさんを教えている時のお姉さんの方が目が優しい。だから、オレたちの指導がキツく見えるのは、気のせいじゃないだろうな。

（こつそり、回復呪文でも唱えてみようかな）

みんな疲れているようなので、オレはそんなことを考えた。

でも、振り付けを覚えるだけでも精一杯だ。

（……それなら、覚えた振り付けのところで！）

「はい、はい、はい、はい！」

お姉さんが手拍子を取り、オレたちは教えてもらった振り付けを繰り返した。

狙い目は、真ん中よりもちょっとあとの、激しい場所が一段落した落ち着いた動きのところだ。ここは簡単だったから、すぐに覚えられた。

そこをひたすら待ち、オレたちは手と足を大きく動かす。

（ここだ！）

やっときた狙い目に、オレは踊りながら呪文を唱え始めた。

効き目は弱いけれども皆全員の疲れを癒すことはできそうな、そんな呪文。

「……少年、なにをぶつぶつ呟いているのかな？」

ここでお姉さんの邪魔が入った。……しかし、最後まで唱えなくてはい！

やっとのこと白魔術の癒しの光は皆に届いたようだった。踊りの中で少しづつ削がれていったなけなしの精神力を使って、ようやく呪文を唱え終わることはできたのだ……が。

「こっそり魔術を使うのは反則じゃないかしら？」

お姉さんはにっこにこ満面の笑顔をうかべているものの、声はまるで笑っていない。

「みんな、疲れているかと思ひまして」

けれども、ひるむまいと、オレはお姉さんの目を見て言い訳をする。

「あたしは助かったよ。ありがとね、リユード」

そんなオレに、ルシアは素直にお礼を言ってくれた。

……疲れて頭がおかしくなっているのだろうか？

それはさておきとしても、皆の役に立てたということはオレにとって嬉しい事だった。

「じゃ、回復呪文使う子はもっと踊らないとね」

「な、何ですか」

その一瞬の間、お姉さんは再びオレを踊らせようと、肩を貸して立たせようとした。

「だったら先生、みんなに水とかあげればいいじゃない？」

けれども、ミレッタさんはオレたちをかばってくれたようだ。さすがは依頼人。

「うぐ。……そうね。じゃあ、回復呪文をつかうほど疲れていたのなら、少しは休ませてあげよう」

お姉さんは一瞬寂しそうな顔をしたものの、ミレッタさんの提案には一応のこと従っていた。

「じゃ、水でも飲もうぜ。このままじゃ干涸びる」

「そうだな。オレ、このまま干物になるんじゃないかと思った」

「ははっ。リユードの干物の出来上がりだ」

「嬉しくない、それ」

オレはデイルと共に、水飲み場へと向かった。
そこから湧き出る、澄んだ水に手を浸すと、暑さを和らげるような冷たさが伝わってきた。

冷たさを保つ魔術でもかけられているのだろうか。

「……生き返ったあ」

オレは思わず、そんなことを口にしてしまっていた。

そして、また次から次へと湧き出る水を手ですくっては口に含む作業を続ける。

「ねえデイル、普通の水でも美味く感じないか？」

「だな」

「美ー味ーしーいー!!」

デイルと共に救いを得たと思った時、水飲み場の反対側からルシアの叫び声が聞こえてきた。

「ルシア、いくら美味しいからって」

オレは呆れ半分で反対側のルシアに返す。

「美味しいのは美味しいから!」

「叫んでまた体力消費しても知らないよ」

「リユードも感動してたじゃない」

ルシアと一緒にいたのだろう、ニーリさんの声も聞こえてきた。

「やっぱり水分補給って大事ですね」

「あら、満足できたかしら? じゃ、続きを始めるわよ」

油を売っていると思われたのか、お姉さんはわざわざこちらまで来て催促をした。

「はい、控えめコースをお願いします」

「ふああゝ、疲れたね」

踊りの続きも終わり、ようやくお姉さんはオレたちを解放してくれた。

皆は解放感に、ぐったりと床に座り込んでいた。

ルシアは眠たくなつたのか、あくびが混じっている。

「今日はみんな、ゆっくり休みましょ？」

疲れて動くのにもはばかりれるオレたちに、ニーリさんは優しい笑顔をくれた。

我らがサブリーダー、メンバーへの気遣いは忘れません。

「私のレッスンはどうだったかしら？」

「出来れば二度と受けたくないな」

感想を問うお姉さんに、多分、積もった山で一番体力がある（と思われる）デイルでさえこの反応。

控えめとオレが頼んだのに全然控えめではありませんでした。

「そう言われるとまた教えなくなっちゃうなあ。勿論、お代は大サービスで！」

「確かに、教え方は上手だったわ。もう私、振り付け全部自動再生できちゃう」

「あたしも」

「じゃ、ミレッタさんのライブまでは私がつきあうわ。じゃあこれから、よろしくね」

「来ないといったら、あなたはどうするかしら？」

「あなたたちの居場所を突き止めるまで」

「ミレッタのように、先生も彼らを気に入ってたんだね」

「勿論よ」

ニーリさんの問いかけのお姉さんの答えは、冗談に見えても本気で積もった山の所在地を突き止めてきそうな言いぶりだった。

……ライブ当日まで、地獄のダンスの猛特訓は続きそうだった。

第十三話 ギルド流演出作戦（5）

とうとうミレッタさんのライブの日はやってきた。

オレたちは直前の準備に精をあげている。

街の中央の広場に特設ステージがあるのだが、そこでは別の時間に様々な催し物があるらしい。コメディアンらしき人や楽器の演奏家のような人もちらほら見られた。

「頑張ろうね、ミレッタ！」

「うん、ルシアも盛り上げてよ！」

主役であるはずのミレッタさんまでが、ライブの準備に積極的に参加していた。

彼女のためのオレンジの舞台衣装が目を引く。

彼女はふわふわのスカートを揺らしながら、楽しそうにルシアとあちこちを駆け巡っていた。

「リユードくん、頑張ろうね」

背後から柔らかな声が聞こえる。

この声は、ソアラだ。

「……ああ。ソアラもな」

オレはちらりとだけ振り返った。

それでもソアラはオレから目を背けずに、微笑んでいる。

一体、何が可笑しいんだろう？

「ふふっ、その服、似合ってるよ？」

「余計なお世話だ！」

……まさしく、率直な意見。オレは今、バックダンサー用の白いスーツに身を包んでいるのだった。

ソアラは裏方なので、普段の水色のワンピースだ。

「もう、照れてるんだから」

くすくすと、けれども嫌み無く微笑むソアラ。

「知らないな、さっさとすべきことを片付けちゃおう。皆さーん、

何か手伝うことはないですか？」

そんな彼女に、自身のちいさな動揺を彼女に気付かれたくなかったんだ。

「そんな格好、珍しいなって思ってたさ」

ソアラがそつとつぶやいた内容は、オレには知らない。

「次は、期待の新星、ミレッタさんによるステージです！」

司会のお姉さんがステージの始まりを告げる。

オレたちはミレッタさんの背後で幕が開くのを待っていた。

ややあつて、曲が流れ始める。アイドルらしいアップテンポの、ノリのいい曲。

曲のテンポに合わせて、幕が開いて行った。

目の前にはまばらにお客さんが見えている。客席の三分の二くらいは埋まっていた。

今回の催しは無名の人ばかりで構成されているからだろうか。それでも緊張することには変わらない。

オレは必死に呼吸を整える。

ミレッタさんが歌い始めると同時に、オレたちはダンスの先生に熱心に鍛えられた振り付けを再現し始めた。

ここまでは順調だったのだ。

しかし、サビに差し掛かろうとしたところで、突然曲は止まってしまった。

ミレッタさんは歌い続け、オレ達も踊り続けていた。しかし、警備員さんの一喝によって、やめざるを得なかった。

「大変です、魔物が街に入ってきています！ 皆さん、避難してください！」

「嘘？」

ミレッタさんは動揺を抑えきれないようだった。

ステージの上でしゃがみ込み、身動きも取れない様子だ。

「ここはオレたちがなんとかする。ミレッタさんはとにかく逃げるんだ！」

「……うん」

「ミレッタさん、こちらへ！」

ミレッタさんは頷くと、他のスタッフの人々と共に駆け出していた。

「ただ、ここで問題が一つ。」

「オレ達、武器持っていない。」

「警備員さん！ それにニーリさん、任せましたよ！」

格闘の心得のあるニーリさんなら、武器がなくとも何とかなるだろうと推測。

「任せなさい！」

「オレは後方支援してますから！」

……と言っている間に、魔物は現れてしまっていた。
犬に近いようだけれども、体は大きく、獰猛そうだ。

「この棒、使えるんじゃないかな？」

いつのまにかルシアは、倉庫にあったのだろう木材を手になしていた。

「リユードとデイルのぶんも！」

「ありがとな」

その時、魔物はルシアに向かってゆく。

「このっ！」

ルシアは木材を剣の代わりに振るって応戦。けれども、魔物とは拮抗状態だ。

「おい、もう一体いるぞ！」

デイルの視線の先には、同じような獣型の魔物。

しかも、ルシアと応戦している魔物よりも強そうだ。

けれども、このまま拮抗していたら単身で食い止めるルシアは力負けしそうだ。

どうするべきか——オレがそう悩んだ矢先、火の玉はルシアが食い止める魔物向かって飛んできていた。

「わわっ」

魔物の力が一瞬だけ緩み、うめき声が聞こえる。

ルシアは戸惑いつつ、木材で反撃を始めた。

「ぼうつとするな、リユード。今は緊急事態なんだぞ」

「は、はいっ！ 分かってます！」

術を使ったカーレイさんの声は、少しだけ苛立っているようにも見えた。

オレは何をするべきか考えると、思い当たったのは、白魔術を使う者ならではの支援だった。

「……かのものに力を与えよ！」

ルシアに目がけて、術を詠唱する。

一時的に潜在的な力を引き出す、支援術だ。

「おっ、力がみなぎってきたぞ？ ありがとね、リユード！ ……」
それじゃあ遠慮なく、いっくよー！」

ルシアのテンションまでも上がったようだ。

「あまり調子に乗りすぎるなよ」

オレはそれだけ言い残すと、デイル達の方の様子を見に向かった。

「全く、どうしてくれる！」

「どうのこうのって、とにかく弱らせるのよ！」

デイルが迎え撃った魔物のほうは、ニーリさんも応戦しているものの、こちらも苦戦しているようだ。

「力ある限り、わたしが術を使いますから！」

ソアラも加勢しているが、魔物は一向に力が衰える気配を見せない。

オレはニーリさん、デイルの順番にルシアに使ったものと同じ術をかける。

状況は良くなったとは言えないが、少しはマシになったようだ。

「……そろそろ本気を出すべきだな」

一方でカーレイさんは眼鏡を上げ、目つきを鋭くする。

「皆、時間を稼げ。詠唱が終わったらすぐに下がれ！」

そして彼はデイル組にも聞こえるように、声を張り上げた。

「まさか？」

啞然とする二ーリさんを気に留めないカーレイさん。

その詠唱は、とても長いものだった。

まるでぐらぐらと揺れる高さまでに積み木を積み上げていくかの
ように、呪文は紡がれていった。

「落石よ！」

数々の落石が魔物目がけて降ってくる。

魔物との応戦にあたっていたオレ達は、皆一斉に引いた。

「ソアラ、走れるか？」

「大丈夫、ありがと」

術士のソアラが心配ではあったが、彼女の様子を見る限りではそんなことはなかったようだ。

オレ達が落石の後ろに引いてからややあつて、石が落ちる音は収まった。けれども、しばらくの間は砂煙があたりに立ちこめていた。

「やりましたね、カーレイさん」

「ああ。本気を出し過ぎたか」

ふと後ろを見ると、砂煙は収まってきたようだ。そこには岩山が
出来上がっていた。

「あの術……黒魔術師にしか使えないものですよね」

ソアラはおずおずと尋ねる。

「そうだ。ソアラは黒魔術師目指してるんだったか」

「威力が桁違いですね……。プロとの差を感じます」

「ソアラはまだこれから頑張ればいいじゃねえか」

「今回、お役に立てませんでしたし……」

どこか遠い目をしたソアラに、デイルが声をかけた。
先を越されたようでなんだか、悔しい。

「あつ、皆さん、ありがとうございましたー？」

「……我々にかわって魔物退治、感謝いたします」

騒ぎが落ち着いた所で、ミレッタさんはステージに駆け戻ってきた。警備員さん達も次々とオレ達に感謝の言葉を向けていた。

「怖かったでしょう？」

ニーリさんはミレッタさんに優しいまなざしを向ける。なんだかお姉さんみたいだ。

「……うん。でも、積もった山のみんなは何とかしてくれるって、信じてましたから」

「依頼人のためなら何でもするのが私たちよ」

そう言くと、ニーリさんは手をそつとミレッタさんの頭に乘せた。ミレッタさんはうれしそうにはにかむ。

「あの、ミレッタ、積もった山のスポンサーになってもいいですか？」

突然のミレッタさんの申し出に、オレ達は目をぱちくりさせるばかりだった。

「大歓迎だよ！一緒に有名になろうよ！」

真つ先に歓迎したのは、ミレッタさんと仲のいいルシア。

「本当に？さすがはルシア、嬉しい！」

「ね、リーダーにサブリ、お願い！」

ルシアはカーレイさんとニーリさんに手を合わせて頼み込んだ。

「いいんじゃない？ねっ、カーレイ」

「……やれやれ。危険なことには首を突っ込むんじゃないぞ」

「はい。じゃあ、記念に歌いますから！」

ミレッタさんは透き通った声で歌いだした。

本当なら、ライブで歌うはずだった、流れるようなバラード。

伴奏はなくても、歌詞には感情がこもっている。

オレも、積もった山の皆も、彼女の歌声にじつと耳を傾けていた。
サビに入ろうとした所で、どこからかきらきらと光が溢れ出す。

「きれい……」

ルシアは幻想的な光に、口をぽかんと開けている。

「……わたし、ステージでも出番がなかったんだから」

その時、ソアラがオレにこっそり耳打ちしてきた。

「いや、皆も喜んでるんだし、これで十分さ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7005j/>

積もった山のギルドびと

2011年6月15日00時11分発行